改新女子國文

巻三

46
810
昭5

42270
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
85185

資料室

文部省檢定濟
昭和五年四月五日 高等女學校國語科用

文學博士 芳賀矢一 編
文學士 橋本進吉 訂補

改新女子國文

東京 合資會社 冨山房 發兌

46
810
昭5

宮嶋の雨　庄田鶴友筆

広島大学
教
85185
館

改新女子國文　卷三　目次

一　美しい日本……山村暮鳥……一
二　麗かな春……金子薫園……六
三　お遍路さん……荻原井泉水……三
　　良寛さま（自修文）……相馬御風……八
四　讃岐より……有本芳水……元
五　同情……三
六　旅……鶴見祐輔……元
七　趣味の嚴島……五十嵐力……四

八　佛の化身……相馬御風……四八
九　波に咲く花……吉江喬松……五七
大島たより（自修文）……大村嘉代子……六七
一〇　女性美と競技運動……安田弘嗣……七二
一一　ローンテニス……柳澤健……七八
一二　男鹿半島……加藤武雄……八〇
一三　草津より澁へ……若山牧水……九一
天の河（自修文）……山本一清……一〇九
一四　朝は晴れたり……川路柳虹……一一三
一五　正覺坊……北原白秋……一一五
一六　花の思出……吉村冬彦……一二一

一七　自然の復讐……丘淺次郎……一三五
一八　板倉勝重……新井白石……一四四
一九　太田垣蓮月尼……田中嘉三郎……一四九
お茶の客（自修文）……土岐善麿……一五六
二〇　秋ちかし……吉田絃二郎……一六五
二一　新秋の歌……與謝野晶子……一七〇
二二　揚子江の秋その一……南部修太郎……一七二
二三　揚子江の秋その二……南部修太郎……一七七
二四　本居翁の遺蹟その一……一八二
二五　本居翁の遺蹟その二……一八六
本居宣長の母（自修文）……佐々木信綱……一九〇

二六　桃山御陵……………………田山花袋…一九五

改新女子國文　巻三

一　美しい日本

山村暮鳥(一)

日本。美しい國だ。
葦の葉つぱの朝露がぽつたりと
落ちてこぼれて一滴、
それがこの國となつたのだとでも
いひたいやうな日本。
大海の上に浮いてゐる、
かはいらしい日本。

(一) 詩人。本名は土田八九十。群馬縣の人。大正十三年歿、年四十一。詩集聖三稜玻璃。梢の巣にて等の著がある。

美しい日本。
小さな國だ。
小さいけれど、
その強さは鋼鐵(はがね)のやうな精神である。
おゝ日本。
ぴちぴちしてゐる魚のやうな國。
勇敢な日本。
古い日本。
その霧深い中にとぢこもつて、
山鳥の尾のながながしい夢を見てゐたのも、
今はもう昔のことだ。
目をあけて、
そこにどんな世界をお前は見たか。

日本。日本。
お前のことを思ふと、
この胸が一ぱいになる。
お前は希望に輝いてゐる。
お前は力にみちみちてゐる。
そして眞劍だ。
だが日本よ、
お前の道はこれまでのやうに
もうあんな平坦なものではあるまい。
お前は夜晝絶えず
お前のまはりに打寄せてゐる
その波の音をなんと聞いてゐるか。

黎明

寂しくないか。
おゝ孤獨な
遠い一つの星のやうな日本。
からりと晴れた黎明の天空(そら)のやうな國。
ときどきは通雲(とほりぐも)の
さつとかゝるくらゐのことはあつても、
おまへはたゞの一度でも
その顔面(かほ)に泥をぬられたことがないんだ。
そんな美しい國なんだ。
日本。
幸福な日本。
強い日本。

わたしはここで生まれたんだ。
またここで最後の息をひきとつて、
遠祖等と一緒になるんだ。
墳墓の地だ。
靜かな國日本。
小さい國日本。
強くあれ、
健(すこや)かであれ、
奢るな。
日本よ眞實であれ、
ばかにされるな。

二 麗かな春

金子薫園(一)

四月はうるはしいものの纏つた感じのする月である。天地に滿ちる春の光、春の花といふ花は皆咲匂うてゐる。はかない小草の末までも細かい花をつけて、融けるやうに春の日に煙つてゐる。誰の顔を見ても、のんびりと平和さうに見える。しかも平和な動搖ともいふべきものが、その中に起つてくる。それは咲滿ちてゐる花に風があたつて、靜かに搖動かすやうな輕さである。何がなしに胸のうちに起る不安である。家にぢつとしてものを考へてゐることができない。靜かな中に動いてゐる四月の天地は、絶

(一)歌人。名は雄太郎。明治九年東京に生れた。歌集「靜まれる樹」「金子薫園集」等の外。「歌に入る道」等の著がある。

えず人間に何事をか思はせる。

郊外に出て春草を踏む心持には特殊な味がある。夕ぐれなどに草原を歩いて、濕つてゐるやうな柔かさを履物の裏に覺え、また爪先に感じられる時、身に浸みわたつてくる心持は、懷かしい寂しみである。一歩、また一歩、夕ぐれの氣がだんだん迫つてくる時、ひとりといふ感じに伴なふ慰安を覺える。身のまはりには誰一人ゐない。たゞ若草と自分ばかりである。懷かしい寂しみは、身にしみわたつて、聲を放つて泣かしめるばかりである。

懷かしい寂しさといふ心持を今少しいひたい。あたりは薄暗くなつても、春草の原はつきない。草は益〻濕つて足

(一)「うみゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍、大君のへにこそ死なめかへりみはせじ。」(大伴家持)

を擧げるのが重いやうな氣がする。歩けなくなつて倒れたら、自分も草になつてしまひはしないか。「(一)草むす屍」といふことがある。生ける屍のやうに身が動けなくなつたなら、草になるのはあたりまへである。ふと草の上に倒れて、草になり、その草を誰か踏んで、その人がまた草になる。また踏んで草になる。自分の今踏んでゐる草は、誰が倒れて草になつたものかといふ風に、それからそれと考が進んでいつて、はてはもつれてしまふ。

春の野（宮内英子筆）

際やか

　咲滿ちてゐる花の蔭は、一種特別な感じを與へるものである。晝の感じが特に際やかである。融けるやうな日光を一ぱいに浴びて、眞盛の花がそよとも動かないでゐる姿を、その蔭に立つて見てゐる心は長閑な和いだといふ氣持ではなくて、それから春の寂しみを受ける。見てゐて、術ないやうな氣がする。花が散出せばこの感じは破られるが、咲ききつてなすべきことをなし終へたといふさまを見せつけられる寂しさは、不安の情を伴なうてくる。朝の花蔭、夕の花蔭、夜の花蔭には、かうした特殊な感じがない。四月の日光に包まれるすべての物の麗かに穏かなのを愛しながら、心の底にはこの不安の情を拂ひのけるこ

(一)江戸時代の末期の歌人。天保十四年(二五〇三年)歿、年七十六。

とができない。

春の寂しさを落花に觀て表した思想は、佛教の無常に根ざしてゐるが、私は却つて、落花は美しい華やかなものに觀たい。はらはらと空に舞ひ地に散りしく輕いしなやかな氣分は、美しいと見えても、寂しいとは思はれない。また風もないのに數へるばかり散つてくる姿からは、靜かだといふ感じを受けるが、寂しいといふ氣はしない。(一)香川景樹が詠んだ、

梢ふく風もゆふべはのどかにて
かぞふるばかりちる櫻かな

の歌の中に籠められた作者の心持は、三句の「のどか」である寂しい感じを覺えないのがあたりまへである。

旋律

うら安い氣持

咲ききつて、その後はもう散るばかりだといふあはれは、身にしみるものがある。輕い旋律をもつてゐる落花の姿は、それが直ちに音樂美である。ちよつとそゝられるところはあつても、それは心のうはべを流れるに過ぎない。

私は散る花を見るのが好きで、靜かな春の日に散りかかる輕い快い感じの奥に、何物かを見出すことを好まない。花の散つたあとの木蔭は、靜かな、うら安い氣持をしんみりと抱かせる。私は晩春ぐらゐしつとり氣の落着く時はないと思ふ。また四月の末頃の自然ぐらゐ、人間の心に安息を與へる時はなからう。

——自然と愛——

三　お遍路さん

荻(一)原井泉水

りんりんといふ冴えた音が、遙かの山裾からこの山荘にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――「お遍路さん。」とは、なんといふ親み深い言葉だらう。――四國八十八箇所に遺された弘(二)法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。然し、いかに信仰の爲とはいへ、四國を一巡することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵のことではないので、四國の代りにこの小(三)豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得ることとされてゐる。「島四國」と

(一)俳人。名は藤吉。明治十七年東京に生まれた。自然の扉。昇る日を待つ間。詩と俳句等の著がある。

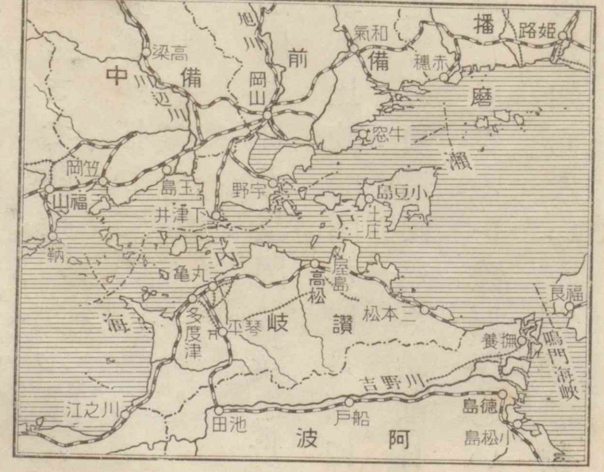
(二)空海。讃岐の人。平安朝に於ける高僧。眞言宗の開祖。延喜二十二年（一五八一年）六十二歳で歿した。

遍歴

(三)讃岐大串崎の北方の海中にある。

功德

いふ言葉もできてゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡(一)山から、もしくは高(二)松からくるお遍路さんは、船で、土(三)庄（とのしやう）港に着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りのものを太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多い



(一)岡山縣岡山市。

(二)香川縣高松市。

(三)小豆島第一の都會。岡山から十八浬、高松から十二浬。

塔婆

金剛杖

先達

のは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりんりんといふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡してくる。一體遍路といふものは、いつ頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信念を厚くする上

扶助

紛失

からいつても、誠に好いことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る所で愛せられる。また惠まれる。お遍路さん同志もまたお互に遍路であるといふことの爲に信賴する。また扶助する。これが實に好いことだと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を敎へ合ひ、足らぬものをたし合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けばどの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふ

遍路

讃仰
欺瞞

ことだ。これは遍路としての誰もが一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識からくるのだ。この道に參するには、知識も、修養も、資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することができるのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出てくるのだ。これは實に美しいことだ。爭鬪と欺瞞の滿ちた社會の中にあつて、信頼と扶助に心を合はせてゆくくらゐ美しいことが他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ、信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。

銘々
暗示
心を心とす

そしてこれは獨りお遍路さんの上のことだけではない。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならないものを負うて、自分の名前を書いた札をまき散らしながら、自分自分の道を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助が行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならない。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちはまづ彼等の信と愛を以て人生を歩きたいものである。

——山水巡禮——

(一)詩人。評論家。名は昌治。明治十六年新潟縣に生まれた。御風詩集。自然生活と文學。對山雜記等の外に、山僧良寛に關する著が多い。

(二)新潟縣蒲原郡。

(三)彌彥、角田、石瀨、國上等の山を指す。

自修文

良寛さま

相馬御風(一)

うらうらとした日和が幾日も續きました。ついこの間までは冬枯のまゝになつてゐた蒲原(二)の平野も、いつしか菜の花畑のはれやかな黄色で彩られ、田にはあちこちに田打に出てゐる人たちの唄聲さへ聞かれるやうになりました。田中の榛(はんのき)の並木もそろそろ若葉の綠が目に立つやうになり、あちこちの村々には李や杏の花が白く浮出て見えました。平野のはて遠く東南の空に霞んで見える高い山々には雪がまだ白く見えるが、近く西北の空に仰がれる山々(三)は、もうすつかり雪が消えて紫色に霞んでゐました。空にはもう先驅けをして來た勢のよい燕の姿も見られました。

庵のあたりの雪が消え、山を下る坂路の土が現れてからと

托鉢　僧侶が鉢を持ち人の門に立つて米錢を貰ひ歩くこと。

(一)新潟縣西蒲原郡國上山にあつた、良寛の庵室。

いふものは、良寛さまは一日としてぢつとしてゐることはできませんでした。快い春風に吹かれながら、毎日毎日平野の中の村々を托鉢して歩きました。そして今日は牧ケ花の解良(げら)、明日は眞木山の原田、明後日は與板の山田、その次はどこといふ風に、久しく訪ねなかつたあちこちの親しい家々に泊つて、幾日も五合庵(一)へ歸らないことさへありました。

どの家へ行つても、良寛さまは、家中の人たちから歡び迎へられました。下男下女に至るまでも久しく逢はなかつた慈父をでも迎へるやうに懷かしがりました。

今日も良寛さまは前夜泊めて貰つた地藏堂の中村の家を出て、その町々の家々を托鉢して廻りました。三々五々町中で遊んでゐた子供たちは、いづれも良寛さまの姿を見つけると叫びました。

「や、良寛さまだ。」

「おい、良寛さまが來なさつたぞ。」

そして先を競うて良寛さまの周圍に集つて來ました。

「良寛さま……」

かう一人が良寛さまの顔をのぞきこむやうに見上げて呼びかけると、

「良寛さま……」

と他の一人が法衣の袖を引いて呼びとめます。

「良寛さま……」

「良寛さま……」

「良寛さま……」

結局そこに居合はせただけの子供たちが一人殘らずかうして口々に良寛さまの名を呼びかけるのでした。

すると良寛さまはそれ等の一人一人に對して一樣に、

「あいよ。」

「あいよ。」

とやさしく應酬してやるのでした。

かうして良寛さまはいたるところで子供たちを悅ばせ、いたるところで彼等の友だちになりました。

「良寛さま、はじきをしよう。」

「良寛さま、てんまりつかう。」

「良寛さま、かくれんぼしよう。」

誘はれるまゝに良寛さまはまた彼等と一緒に遊びました。と

良寛と子供（河内舟人筆）

りわけはじきと手毬とは良寛さまの最も好きな遊びでした。そして良寛さまは自分でも始終はじきの材料にする貝殼や、手製の手毬を袂に入れて持ち歩いてゐるのでした。

春の野に菫つみつゝ鉢の子を　わすれてぞ來しあはれ鉢の子

それは春も酣な或日のことでした。お山の庵へ、幾日もの托鉢からの歸り道で、良寛さまは道ばたに咲いてゐた菫の花の美しさに心をひかれたあまりに、つひそこに大事な鐵鉢を置き忘れて行つてしまひました。

しかし、いよいよ庵への坂道にさしかゝつた時に、良寛さまはふとそれに氣がつきました。そして慌ててそれを探しにもと來た道に引返しました。

をりよくそこには村の百姓たちが二三人働いてゐました。そして良寛さまの困つた樣子を見てとつて、一緒になつて探してくれました。やがて、

「あ、良寛さま、あつた。あつた。」とその中の一人が叫んで、それを見つけ出してくれました。

しかし折角村の人が探しあててくれた時には、その鐵鉢の中に貰ひ溜めてあつた米は大かた雀に食はれてしまつてゐました。そこからは幾十羽となない澤山の雀が舞ひ上りました。そしてあたりの木にとまつて、チュウチュウと賑やかに鳴いてゐるのでした。

「良寛さま、これで御座りませう。」かういつて村の人はいかにも貴げにそれを捧げて良寛さまのところまで持つて來ましたが、「あつたにはありましたが、良寛さま、お氣の毒なことには、

この通り中の米を雀の奴等が食つてしまひました。折角貰うてござらしたのに。」かういかにも氣の毒さうにいひ加へました。

しかし、良寛さまはそんなことには一向氣もとめずに、

「あ、これぢや。これぢや。ようこそ見つけてくださつた。」といひいひ母親がわが子を抱きでもするやうにして、それを受取り、

「ありがたい、ありがたい。」

かういひながら幾度となくそれを押し戴きました。

「まあ、良寛さまてば、中を見さつしやれ。中を。米がみんな無うなつてゐますてがに。」村の人は良寛さまのさうした樣子を不思議がつていひました。

それでも良寛さまは少しもそのことに氣をとめませんでした。そして相變らず「ありがたい、ありがたい」を繰返しながら、

空になつた鉢の子を兩手で抱くやうにして、いそいそとお山の庵へと戻つて行きました。

「ほんに、良寛さまつてば何て慾のない人だらうのう。」

村の人たちは口々にそんなことをいひながら、ぼんやりと良寛さまの後姿を見送つてゐました。

永い春の日もそろそろ暮れかかつてゐました。

花も散りつくして、いつしか若葉の色のみづみづしい頃となりました。さまざまな鳥の音に賑はうてゐた山の庵には、今は遠くの山田で鳴く蛙の聲のみが夢のやうに漂うてくるのでした。

百鳥の鳴く山里はいつしかも
蛙の聲となりにけるかな

諧調　やはらかい、わるびれのない調子。
夢幻的な情緒を誘ふ　うつとりとするやうないい氣持になつていく。
供養する　佛前に物など供へて回向すること。

草のいほに足さしのべて小山田の
山田の蛙きくがたのしさ

良寛さまはこの蛙の聲を聞くことが、一年中での最も樂しいことの一つでした。近くで聞くと一匹一匹妙な聲を出してゐるのであるが、遠くで聞くとそれは何ともいひやうのない快い一つの諧調をなして夢幻的な情緒を誘ふのでした。

苗代田では稻の苗がもう一寸以上に伸びてゐます。田植の季節が一日一日と近づいて來ました。それを思ふと良寛さまもさすがにぢつとしてはゐられないやうな氣もするのでした。そして例によつて自分でもまづいとは承知してゐながらも百姓たちの田植をしてゐる有樣を繪に書いて、それを毎日禮拜し供養し、せめてもの自分の心やりとしました。

こんな風に農人たちの忙しさを思ひやると、とかく托鉢にも出澁るやうな日が良寛さまにも有り勝ちになりました。それにしても日永のこの頃を山中の庵に獨居してゐることは、いかな良寛さまにもそれはあまり退屈なことでした。

或日のことでした。良寛さまは庵の周圍に繁れるだけ繁らしてある雜草の上にどかりと腰をおろして、ぼんやりとあたりを眺め廻してゐました。どの木も、どの草も、夏に向はうとする暖かな太陽の光をうけて伸びられるだけ伸びようとしてゐる。その勢がたまらなく良寛さまの心を悦ばせました。

と、何心なく、覗きこんだ庵の緣の下に、良寛さまは意外なものを見つけました。それは一本のひよろ長い筍でした。庵室の裏の竹藪の根がいつの間にか地をもぐつて行つたものと見えます。しかもかはいさうなことにはその筍は、緣板の爲に伸びようとした頭を壓へられて、みじめな格好に折れ曲つてゐ

つれづれ　用がなくてたいくつなこと。

るのでした。それを見ると良寛さまは思はず

「かはいさうに……」かう獨言をいひました。

そして慌てて庵室に飛込んで敷いてあつた薄べりをまくりました。薄べりの下はすぐ縁板になつてゐました。良寛さまは更にその縁板の一枚をはぐつて見ました

「ここだ。ここだ。」

良寛さまは丁度うまく筍のありかを探りあてたのでした。

「そしてかはいさうにのう。」

こんな風に恰も生あるものに、話しかけるやうにいつて、良寛さまはその筍に手をかけました。

つれづれな良寛さまにはそれは願つてもないよい仕事でした。良寛さまはそのかはいさうな筍の爲に縁板に穴をあけてやらうと考へたのでした。

——良寛坊物語——

(一)詩人、歌人。名は欽之助。明治十九年。岡山縣に生まれた。旅人。芳水詩集。海の國等の著がある。

龍の宮居

四　讃岐より

有本芳水(一)

千石船に帆をあげて、
春日うらうら島めぐり、
海は霞にうすぐもり、
さくら鯛うく波の上。
うす紫の島のはて、
潮風さつと鳴るまゝに、
龍の宮居のあらはれて、
浦島の子もかへるらん。
大島、小島、はなれ島、

めぐし

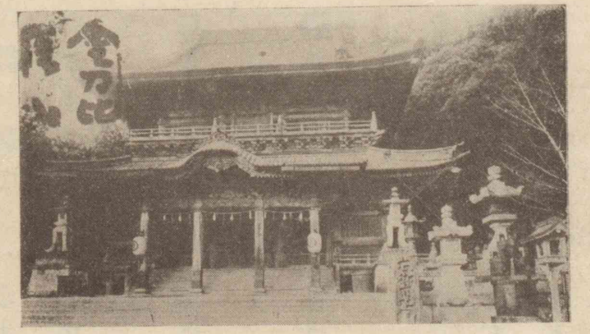
(一)國幣中社金刀比羅宮。香川縣琴平町に在る。

巡禮

磯にまろべるうるはしき、
小さき石のいろどりに、
夢もめぐしや春の旅。
船は着きたり讃岐路へ。

多度津は歌によきところ、
(一)金比羅まゐりの人々に、
遍路の人もまじるかな。

寺をめぐりてかへりくる、
巡禮の子のおひずるは、
ふた親のあるあかね染、
ひらりと風にひるがへる。



金刀比羅宮

(一)眞言宗。志度寺。香川縣志度町にある。

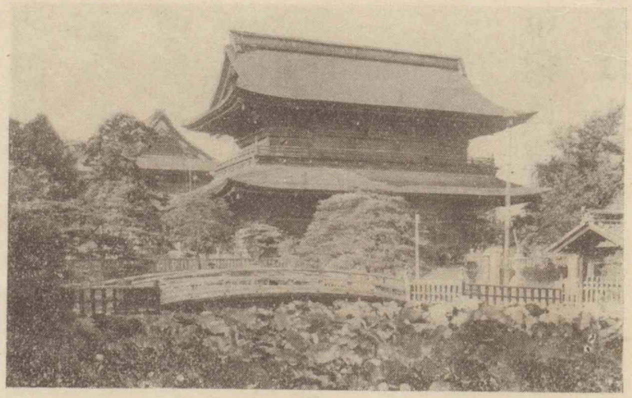
きざはし

名だたる歌まくら

はるばる阿波にかへるてふ、
若き女の藍賣は、
ひかりまばゆく落つる日を、
のぞみて涙ながしたり。

鳥もむなしくなりぬれば、
詣づる人もまれまれに、
(一)志度の御寺に花散りて、
老いにけるかなこの春も。

きざはしたかき金比羅や、
ここは名だたる歌まくら、



志度寺

（一）臨済宗。今は圓覺寺に屬する。

青葉がくれにちらちらと、
櫻の散るもあはれなり。
宮の欄間に飛びて鳴く、
鶯の音のさびしさよ。
あゝ、ゆく春の悲しさを、
われももろともうたひ見ん。

—旅人—

五 同情

弱者たる女子に同情した著しい例は、鎌倉松が岡の東(一)慶禪寺に於て見ることができる。寺はもと僧寺であつたのを、頼朝の叔母が尼となつてここに住し、それから尼寺

中興の祖
（一）北條氏第六代の執權。
（二）同第七代の執權。
（三）北條貞時。
天聽
虐待
本願
（四）第九十六代。

となつた。中興の祖は北條時宗の(一)夫人で、卽ち北條貞時(二)の母である。覺山といふのがこの人で、

(三)鎌倉殿へ覺山願ひ候は、出家の身ながら女のことにて候へば、利益の種もござなく、それにつき、女と申すものは、不法の夫にも身を任せ候こと尋常に候へども、女の狹き心にては、ふと邪の思立にて、自殺などいたし、候ものこれあることに候間、三箇年のうち當寺に相抱へ、何卒緣切り候うて身輕に成候寺法相願ひ候由、これに依り貞時より天聽を經られ、その意に任せられ候。

と寺記にある通り、夫に虐待された婦人を救はうといふのが本願である。それより五世の用堂尼は後醍醐天皇(四)

の女、第二十世の天秀禪尼は豐臣秀頼の女で、卽ち德川秀忠の孫であつた。この寺は男子禁制で、女が逃げてここへはいれば、なんともすることができない。つまり弱者たる女子を保護するといふ目的で成立つて居つたのである。夫と不和になつて直ちにこの寺へ逃

新編鎌倉志（貞享版本）所載

げこんで、二三年たつて、また他へ緣附くといふやうな、ふらちなものの隱場所となつた惡例もないではないが、これは一面の弊害で、止むを得ない。頼りのない女人の爲にかういふ寺のあつたといふことが、いかにもおもしろく思はれるのである。

くやしくば尋ね來て見よ松が岡

など川柳に歌つたのは、卽ちこの寺である。

女子には特に同情が大切である。雛祭には人形をいたはる意味もある。二月八日及び十二月八日の兩日には、女(一)子の針供養といふことをする。針の折れたのを集めて、淡島の社へ納め、一日絲針の業を休むのである。裁縫の業は

（不埒）

弊害

(一)和歌山縣海草郡加太村（古名淡島）にある加太神社。婦人の祈る神として諸所に祭られる。

(一)下總の俳人長翠の句。
(二)兵庫縣武庫郡白畑原の山上にある。
札所廻り
六十六部
(箒)

女子の平生の仕事であるから、毎日毎日使用した針に對して、感謝の意を表する心持だらうと思ふ。かういふ無生物に對しての供養は、誠に優しい心掛である。

　如月(一)(きさらぎ)や若き心の針供養

正月の元日にははうきを使はぬ。一年中一日として休まないから、この日だけは休ませるといふのも、はうきに對しての同情である。この心を以て召使や奉公人に對しなければならぬ。またこれは無生物ではないが、二月初午の日、摩耶(二)參に馬を引いて參詣して、飼馬の無難を祈るといふのも、優しい風習と思ふ。

觀音の三十三番の札所廻り、六十六部のうち連れて行くのは、なんとなく哀な詩的な感じを起させるものである。これは淨瑠璃のお鶴よりの聯想からではなくして、淨瑠璃がこれを材料にしたのが、卽ち人々のこの感情を利用したのである。御詠歌の哀な調子につれて、野山に行暮れて旅するのは、人の情を賴りとするのである。これ等の人々の境遇には、いろいろ哀な物語が疊まれてゐるかと思へば、そこば

野山に行暮れる
そこばく

お鶴
(栗原玉葉筆)

くの報謝を與へるのも、決して惜しくはない。田舍を旅行して、どころどころの門戸に、「十年間諸事儉約。ものもらひ入事無用。」などと張出してあるのを見ると、なんとなく厭な感じを起す。諸事儉約は元より結構である。然し、人の情にすがつて旅する哀な巡禮者などに向かつて、些細な報謝が施されないであらうか。儉約してといふ聲の下に、慈善といふ同情の心が塞がれてしまふのは、餘りに現金な世の中と思ふ。謠曲の足利時代のやうに、行暮れた旅僧に一夜の宿を借すといふ接待まではなくとも、せめて哀な物乞に少々の志を出すくらゐな情は、あつてもよいではあるまいか。さても昔の世の懷かしさよ。

報謝（貰）
現金な世の中

六 旅

鶴見祐輔(一)

夏がくる。夏になると、いつも旅を思ひ出す。旅と夏とには共通な心持が通つてゐる。著物が輕くなるだけでも夏は愉快である。そして世間がいちどきに明るくなる。眼に見える自然のすべてが渾身の力をもつて立ちあがつてゆく。太陽が幾百日このかた、ためて來た精力を地上に叩きつける。その天と地との凄じい戰の中に人間だけが恐れ入つて縮込んでゐられるわけがない。大抵の人が飽き飽きした自分の家から飛出して、大自然の懷の中に躍り込んでゆく。これが旅である。

(一)思想家、政治家。群馬縣の人。三都物語、南洋遊記、小說、母等の著がある。
渾身の力

人間性の奔騰

(一) Romantic.

客愁

旅は解放である。自由を求める人間性の奔騰である。旅は冒險である。見知らぬ境涯を追究する古代獵人時代の本能の復活である。旅は進步である。古い環境の包藏する廢頽氣分から脱出しようといふ人類の無意識な自己保存的努力である。そして旅は詩である。すべての人が氣のつまる世間づきあひの中に、大切に胸の底に祕めてゐる(一)ロマンティックな性情を氣儘に發露するのである。そのいろいろな心持が我々を山と海と湖とのあたりに追ひやる。新しい見知らぬ都に追ひやる。そして日々に變る眼前の風物を送り迎へて、旅愁とか、客愁とか孤獨とかいろいろな文字を並べながら實は皆一樣に幸福である。

(一) Immanuel Kant. 獨逸の哲學者。(西曆一七二四年—一八〇四年)

環境の裡

旅の眞の味はひは新しいものを見て、智を増すのみではない。眼前に變りゆく風物を樂しむのみでない。それは自分自身を味はふのである。

(一)カントはいつも書齋の窓から隣家の林檎の樹を眺めて、彼の哲學を考へてゐた。或日隣家の主人がさうとは知らず、その林檎の樹を伐つてしまつてから、見當がつかなくなつて彼がたいへん考へにくくなつたといふ話です。然し、カントのやうに、同じ環境の裡に坐して、刻々變化する新思想が湧いてくるといふことは、我々凡人には、なかなか到達し難い境地である。そこで我々は旅に出る。旅ほど我々が考へさせられるをりはない。それは、我々

が考へるのではなくして、變化する四圍の物象が、自分たちの胸臆から、未だ知らざる我々の姿を引きづり出してくれるのである。それは或時は音であり、或時は色であり、或時は人であり、或時は物である。

それが或時は背後から、だしぬけに飛付いてくる。或時は眞正面に額にぶつつかる。そのたびに我々が涙ぐんだり、笑つたりする。

旅の收穫、それがロマンティックな希望を旅する者の胸の中に喚びさます。それは人々でみんな違ふ。それは旅旅でみんな違ふ違ふから我々の心持が大きい期待をもつて一ぱいになるのである。

誰でも修學旅行に出る前の晩の喜を懷かしい少年時代の思ひ出として、記憶しない人はあるまい。それから初めて洋行する時の前夜の感慨を、また氣輕な漂泊の旅に上る前の日の心持が懷かしまれる。旅の收穫はいろいろある。そして一年も旅をしてくると、我々の思想上の荷物が知らぬ間に嵩だかになつてゐるのである。

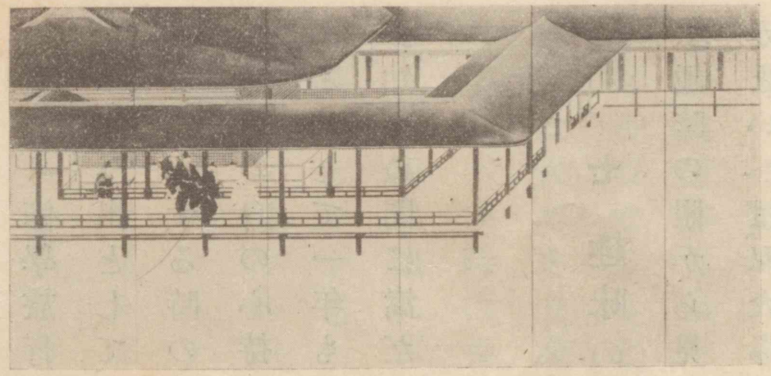
——思想山水人物——

七　趣味の嚴島

五十嵐力(一)

趣味の眼から見た嚴島(二)の中心の味はひはどこにあるかといへば、私たちは第一に彌山(三)(みせん)を背景として立つた低

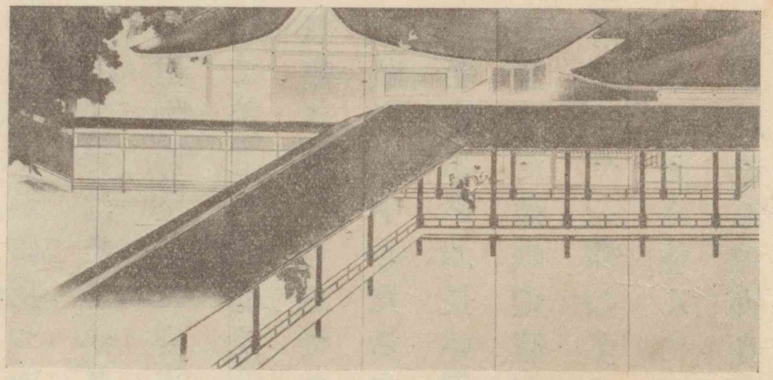
(一)國文學者。文學博士。早稻田大學教授。明治七年山形縣に生まれた。新文章講話、新國文學史、國歌の胎生及び發達等は名著として知られてゐる。
(二)廣島縣佐伯郡大野村から七町。
(三)島の中央なる高山をいふ。



元就の嚴島詣（山川永雅筆）（その一）

い廣い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

まづ藝州本土の對岸から船を傭うて、ぎいぎいと艪の音おもしろく漕出でる。青一色で塗潰したやうな恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から違つた色彩の社殿や堂塔が次第に著しく浮出てくる。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、だんだんと大き



元就の嚴島詣（山川永雅筆）（その二）

さを加へてくる。また漕ぐほどに、鳥居も、社殿堂塔も、益々大きさ鮮かさを加へてくる。その中に次第に進んで大鳥居の下にくると、私たちは覺えず驚きの目を見はるであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつてゐるではないか。向うを見ると、青雲の中に冲つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱

にゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。その色彩を見よ。形狀を見よ。一つ一つの建物の整つた姿を見よ。多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ、氣高さ、神々しさであらう。

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右に、百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺や瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縱向、横向、いろいろな社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を擴げたやうに横長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、滿潮には波の上に浮かんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣。これ等のすべてが、何ともいはれぬ、調和をなして、綠の山と白波の海との間に鎭まつてゐる趣。高さ、大きさ、ものものしさ、荒々しさは、前後の護衞者たる山や、海や、鳥居に讓つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやち鉾もない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、何

に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんなことを考へる。設計者の鬼神は、海底でできあがつた龍宮城を、嚴島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上るのを凝視しながら山と海とに對する釣合を見計らつて、ここだといふ所で、ぴたりとせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。

――甲鳥園隨筆――

八 佛の化身

相馬御風(一)

私は先頃一つのいい傳說を聞いた。それは越後の北蒲

凝視

立脚點

(一)自修文「良寛さま」の課參照。

古刹

原郡の乙村にある乙寶寺といふ古刹に參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境內に先年特別保護建造物として指定された、たまらなくいい形をした三重塔がある。かの傳說はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、さすがに有名なその棟梁も、心を痛めつくしたといはれてゐる。どう工夫して見ても、うまくゆかなかつた。たうとう彼は工事半ばに、絕望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼はたゞ姿を晦ましさへすればよかつたのだ。

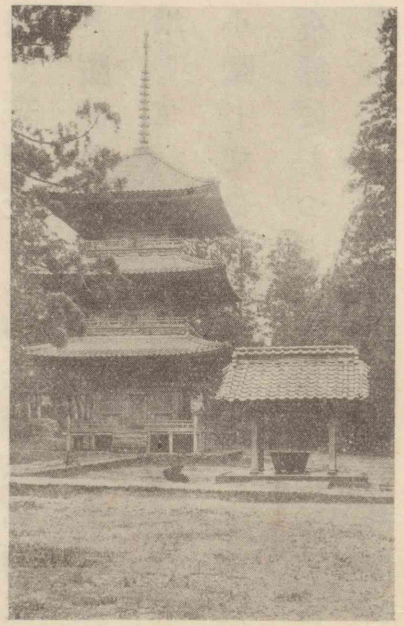
棟梁

彼は眞暗な夜道をたどつて海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ西へと歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思はれた。いつそあの暗い波間に飛込んでしまはうかといふやうな突きつめた思も、幾たびとなく彼を襲うた。然し、彼はやはり死ねなかつた。彼はたゞむちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命をうちこんで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼にとつては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも彼はなぜかうしてその場を逃出して來たか。それを反省

矛盾

する時、彼は我ながらその卑怯を詛はずにはゐられなかつた。自己に對する詛は、やがて自己に對する憎しみであつた。けれども彼はその詛ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほそこに故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦みは、たゞ徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へるものの歩みに外ならなかつた。



乙寶寺三重塔

黎明

彼の心は底知れず暗かつた。然し、天地の闇はいつとなしにほのぼのとして、黎明の光に照らされはじめた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ波の穗の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前にははてしもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを增して行つた。明離れてゆく海には、光を歡ぶが如く、波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりと濡れた砂濱に長く長く續いた彼の足跡、むちやくちやに闇の中を歩いて來た彼自らの足跡——それさへも今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現れた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れはてて、たゞ茫然とその美に醉うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。

それから幾時過ぎたかわからなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに、子供たちの樂しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めたやうに、彼はふらふらと起上つた。と、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。何といふわけもなしに、彼はその方へ吸寄せられた。然し、子供たちは遊に夢中になつてゐるのか、彼の近寄つたことに少しも氣づか

なかつたが、その刹那、その憐な建築師の疲れはてた兩眼には、突如として不可思議な輝きが現れた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積重ね積重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、そのことに全心をうちこんでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る代る彼等はそれを續けて、着々として或一つの形を組立てつゝある。が、なかなかうまくゆかない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾度となく失敗し、幾度となく始める。しかも彼

等は失望しない。倦まない。止めない。そして遂に或一つの纒つた形ができ上がる。すると、彼等は共に手を拍ち、聲をあげて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何ものかを獲得したやうな確信に輝く面もちを以て叫んだ。

「そこだ。その呼吸だ。その組方だ。」

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道へと驅戻つた。――

さうしたことがあつて、漸くのことでできを上がつたの

端嚴

化身

(一)Blaise Pascal. フランスの數學者、哲學者。(西曆一六二三年―一六六二年)

附會

權化

が、今日見るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であるといふのが、傳說のあらましである。しかも傳說はそれに附加へて、その三人の子供は大日堂の大日、藥師、彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は私たちを子供にかへす。」とパスカル(一)はいつた。私たちは更に「子供は私たちをほんたうの智慧に導く。」ともいひ得よう。乙寶寺三重塔の傳說は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた。」といふその傳說の附會をも、私はそのまゝ受容れるに躊躇しない。さうだ。すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

(一)佛文學者。早稻田大學教授。明治十三年長野縣に生まれた。著は「靑空」「霧の旅」「輝く海」等の外、飜譯が多い。

(二)支那揚子江の河港。

(三)支那廣東河口にある一小島。

九　波に咲く花

吉江喬松(一)

上海(二)を出て、臺灣海峽を通つて三日間ばかり行くと、香港(三)といふ英國領の島に着きます。ここは全くのヨーロッパ風で、市街が、小さな、そして高い山を中央にして、島を取卷いて建つてゐます。美しい立派な廣い路が島の周圍を繞り、次第に山の中腹まで繞り繞つて登つて行きますが、山の頂までは、外國人は何人でも登ることは許されません。なぜならば、この島はイギリスの東洋での大切な商業の港であると同時に、大切な要塞砲臺のある所で、その要塞の設備を外國人が見てはならないからです。

(一)Singapare. 馬來半島南端の小島。東西貿易の中心地。「棕櫚の花咲く椰子の實みのる」(共に池邊義象の世界一週唱歌中の句)

この島にも、日本人はなかなか澤山商業をやつてゐます。會社の代理店などはいくつもあります。香港の市街の美しさは夜です。そして、それは港に碇泊してゐる船から眺めやつた景色です。海岸より山の中腹までだんだん高くなつてゐる家屋のあらゆる窓から電燈が輝いて、ちやうど大きな蜂の巣の一つ一つの孔に燈火をつけたやうです。そして港の中を通ふ小蒸氣は花電車のやうに美しく飾つて、あちこち走り廻つてゐます。香港までくると、いかにも洋行したやうな氣になります。

香港から先は(一)シンガポールといふ港です。「棕櫚の花咲くシンガポール」と皆さんが歌ふその港です。ここはもう熱帶で、地面から、空中から、暑さがどつと人の身體を包みます。船からおりて市街を通ると、強い花の香やら、水菓子屋の前で嗅ぐやうな果實の香氣やらが鼻をうちます。この公園へ行くと、眞紅な幹をした檳榔樹が眞青な葉をして立つてゐます。また六七寸もある金色や青色のとかげが草の上に眠つてゐます。そして木の枝には栗鼠がかさかさと木の葉を動かして飛んでゐます。そして水の面には紫色の睡蓮がぽつぽつ咲いて、夢でも見てゐるやうです。眞晝頃になると、しんとして物音一つも聞えません。たゞむせかへるやうな強い光の香が空中に漂つてゐるばかりです。全く異なつた國へ來たといふ心持がします。

(一)Ceylon. 印度洋中の一大島。

それから先の港は「椰子の實みのるセーロン島(一)」です。皆さんは椰子の實といふものが樹になつてゐるのを見たことがおありですか。大きな猿の頭のやうな形をしたのが、幾つも幾つも、高い樹の上になつて、いかにも重さうに見えます。その外皮をむいて、また眞中から二つに割つて、中の眞白な實をナイフでそいで、生で食べたり、煮て食べたりします。生栗を食べるやうな味のするものです。

船の上から見ると、この邊の海岸は、ちやうど日本の海岸が松の林で覆はれてゐるやうに、どこまでも椰子の木で覆はれてゐるのです。そして船が港に着くと、どこからともなく、眞黑の子供が小船に乘つたり泳いだりして、その船の周圍に集つて來ます。ちやうど眞黑の大きな魚の群のやうです。これが何かわいわいひながら、水を潜つたり、浮上つたりして船のあたりを騒ぎまはります。これは乘客から錢を貰ひに來たのです。そして銀貨を投げてやると、すばやく小船の中から飛込んで、銀貨の水中に沈んで行くよりも早くその下へ廻つて、巧に受止めるのです。その巧なこと、どんなに遠くへ投げても、また船の眞下へ投げても、一つとして受損ずるやうなことはありません。水中でも、水の表面でも、自由自在に飛びまはり泳ぎまはるには驚かされます。

セーロン島を出た船は、普通ならば印度洋を横切つて、

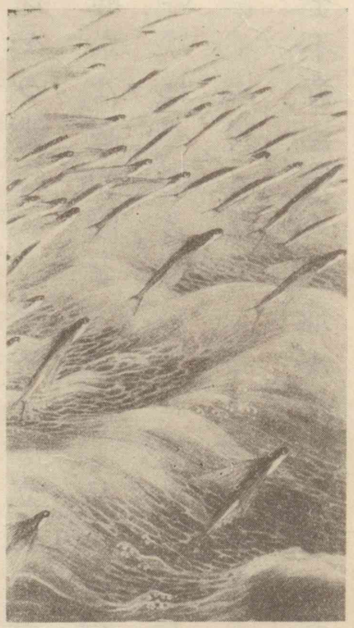
(一)ヨーロッパとアフリカとの間にある海。
(二)Cape of good Hope. アフリカの最南端英領ケープ植民地の岬。

紅海を通つて、地中海(一)へ出るのですが、私の乘つた船は、戰爭最中で地中海が危險だといふので、印度洋を南へ南へと下つて、赤道を越えて、アフリカの南の端の喜望峰(二)といふ所へ向かつたのです。

地圖を披いて御覽なさい。セーロン島から喜望峰までは隨分長い間です。船はちやうど十七八晝夜、山も陸地も見えぬ水の上、いくら四方を眺めても何一つ見えぬ大洋の上を走つて行つたのです。

ところが、船が赤道を越える前後に、無風帶といつて、年中風の少しもない所があるのです。我々の地球の表面の眞中を帶のやうに取卷いてゐる一帶がそれです。そこは

鏡の面のやうに平かで、どつちを見ても小波一つ起りません。たゞ船脚に碎ける波が、深い眠から覺めて驚くやうに、少しばかり騷ぐだけです。眞青な水、目が眩むやうな日の出、一片の雲もない大空、まんまるく四方を取圍んだ水平線。我我の船は今やこれ等の眞中にゐるのです。


飛魚（堀江春齋筆）

そしてその船から立上る煙は眞直に立つて、少しも亂れません。太陽は帆柱の眞上から光を放ちちやうど鏡張の室の中へでも身を入れてゐるやうに四方に照りわたつ

て、實に爽かな氣持です。

けれど、廣い廣い大洋の眞唯中に、生きて動いてゐるものとては何もありません、また何の音も聞えません、たゞ我々の船ばかりです。我々の船のスクリユー(一)が立てる音ばかりです。かやうに靜かな眠の國を一日か二日か航行して御覽なさい。明るいけれど、何ともいはれない寂しさのあるものです。

そんな時に、波の上を不意に掠めて飛んで行くものがあるのを思つて御覽なさい。何でせう。銀色をした小さな魚が列をつくつて、縱に橫に波の上を舞つて行くのです。小鳥ぐらゐの大きさに見えますが、實際はそれより大き

(一) Screw.

いに違ないのです。飛魚です。今まで油のやうに淀んでゐた眠の海、死の海の中へ不意に大きな船がはいつて來て、不思議な姿をして波を切つて行くので、びつくりして俄に波の中から飛立つたのでせう。一列になつて十も二十も飛んで行くのがあるかと思ふと、橫に並んで競爭するかのやうに、後から後からと飛出すのもあります。その銀色にきらきらと光るさまは實に一大壯觀で、目もくるめかんばかりです。これが波に咲く花です。そして、これこそはこの無風帶に於けるたゞ一つの波の戲です。たゞ一つの生きたものの姿です。

船がこの無風帶を出拔けると、波がそろそろ高くなつ

て來ます。今まで滑るやうにしてゐた大きな船體が搖れ始めます。波の大きな頭が遠くから眞青になつて起つてくると、いつの間にかその波頭は船の底へ滑り入つて、船を持上げます。船は思はず前後によろめき、船底のスクリユーはさも苦しげに音を立てて忙しく廻轉します。けれどこれぐらゐはまだ何でもないことです。船が次第次第に日を重ねてアフリカの岸近く寄つて行きますと、潮の流が急になり、船の動搖が一層激しくなつて來ます。さうすると、どこから出て來たのか知れないが、眞白な大きな信天翁（あはうどり）といふ海鳥が、船の上を、また船の周圍を包んで飛びまはります。

自修文

大島たより

大村嘉代子（一）

前便で申し上げましたやうに、昨晩は嵐でございましたので、大島行は思ひとまりまして今朝は歸らうと存じましたが、起きて見ますと風がすつかりをさまつて居りました。宿の屋根の上まで擴がつた榎の木の小枝が、夕べの風に折られて庭のそこここに散らばつて居りますのを、少し心細く眺めましたが、からりと青空に陽がのぼりましたので、また大島へまゐることに致しました。

朝八時、伊東（二）を出ます時は、おだやかでございましたが、沖へ出て見ますと、なかなかの風で、飛魚が目の前をかすめて、すつすつと飛ぶのも餘りよい心持ではございませんでした。小さい和船は沖に出ますほどに高い波の山を越します。あとから

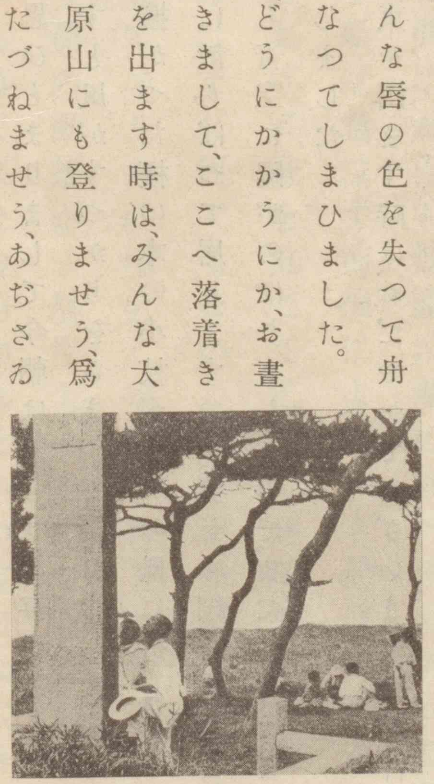
（一）創作家。明治十八年東京に生まれた。亂水金春。柳橋夜話等の著がある。

（二）靜岡縣田方郡の東海岸熱海の南五里。

(一)大島の中央にある活火山。

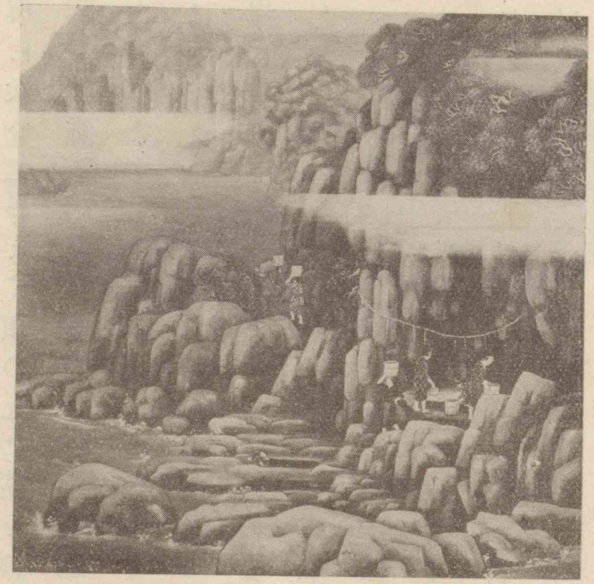
あとからと大きい波が頭の上に落ちて來ますので、着物も帶も、拭ふ間がございません。しまひには、いつそ涼しい位の氣持で、顔も頭も潮の洗ふのにまかせました。一行五人、私をのけました外は、みんな唇の色を失つて舟の底に横になつてしまひました。

それでも、どうにかかうにか、お晝頃元村へつきまして、こゝへ落着きました。伊東を出ます時は、みんな大した勢で、三原山(一)にも登りませう、爲朝の遺跡もたづねませう、あぢさゐの咲きつゞく野も歩きませうなどと申し合つて出ましたのですが、海を渡つて宿へつきますと、すぐ頭の上にむくむくただよつてゐた三原山の煙を見ましても、誰も何とも申しません。



爲朝の遺跡

あいさつに來た宿のおかみさんの驚くほどの多い髪の毛も、お晝飯の給仕に出た島の女の帶なしで幅の廣い前掛をかけた姿も珍しうございました。一同少し元氣になつて、お箸をおくと、二階から見わたす限りの木といふ木が椿であるのに先づ驚いて、散歩に出かけました。



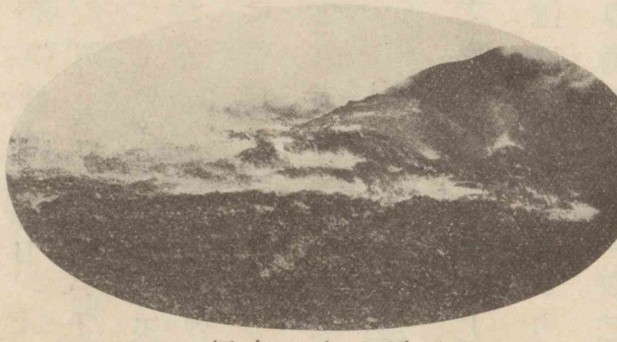
御垂を汲む（佐藤永芳筆）

まばらながら、軒を並べて呉服屋もあれば氷屋もございま

す。道の端には赤い松葉牡丹の大きな花が、つまれもせずに見事に咲いてゐます。頭の上に薪をのせて眞直な姿勢で歩いて行く女、鎌を腰に草を積んだ牛を追ふ女、見るものは皆珍しうございますが、素足にはいた宿の下駄でふむ砂のあついのには困りました。爲朝の館のあとは、もうございませんが、近頃海岸に碑を立てたと申すので、宿の番頭を案内にしてまゐりました。熱い砂を踏んだ足で冷たい草をふむ心地よさに、生きかへつたやうになりまして、椿の木の下に山あぢさゐの澤山咲いた中を通り抜けて海岸へ出ますと、一丈もあらうかと思はれる石の記念碑がございました。青い海を越して遠くに富士が見えました。

夕飯後、島のお婆さんが來て、大島節をきかせてくれました。年は七十位の、島で一人二人といふほどの聲の好い百姓家の

お婆さんださうでございますが、座敷へまゐりましても、手拭を頭にかぶつたまゝで、それでも白扇を持つて拍子をとりながらうたひました。



三原山上の白煙

お婆さんが歸りました後は、めいめいに繪葉書を書きはじめました。私もこの手紙を書いて居ります。あたりはひつそりとして、夕月が淡く三原山にかゝつて、くらい椿の木のかげに牛がないて居ります。潮風が強いのでおすずしく、蚊も少なうございます。明朝は五時頃に起きて三原山に登らうと存じます。登山の様子はまた明日くはしく申し上げます。

末ながら御奥様へよろしく御願ひ申し上げます。

八月五日　　嘉　代

岡[一]本　先　生　御前

いま、月に水を汲む島の女の大島節が、波の音の絶間にきこえて居ります。

一〇　女性美と競技運動

文化の流に比例して、人類は美を要求するものである。美は二つの立場より分類される。一は大自然の美、二は人工の美である。この二者の中最も幽玄にして崇高なるものを大自然の美とするのである。

(一)岡本綺堂。

文化の流

而して自然の生める美の最大なるものは、人體の美である。就中女性の美は、宗教的色彩を帶びて讃美されて來たものである。

ミロー[一]のヴィナス[二]女神像は、婦人美の最も完全にして、且つ崇高なるものと賞讃されてゐる。

この人體美は、喜怒哀樂の感情の自由なる表出に富み、且つ音聲の優雅は、その四肢、軀幹の曲線運動を調和するに至るもので、宇宙の何ものと雖も、この美的表現には及ぶべきものがないのである。もとより人體の美にしても、天稟の性によるとは言へ、その血色の美、筋肉の美は、やがて感情の優美なる表出と調和して、無限の美を形成する

(一)Milo. ギリシヤのキクラデス島の南西部にある。

(二)Venus. 美と愛の女神。

ものである。以上の諸要素は體育運動によつて、更に美の中心生命に接近して行くものである。古代ギリシャ民族が音樂と體育とによつて、心身を訓練し、美の表現に努力し、遂に世界文化の淵源をなし、今日に至るまでもギリシャ文化の榮光は、近代人を支配してゐるのである。

ヴィナスの像

彼のデルファイ[一]に於けるオリムピヤ[二]競技大會は、ギリシャ運動の精粹と美の表現である。青年戰士の活動の舞

(一) Delphi. ギリシャ中部ホシヌ州パルナサス山の南面にある。アポロ神の神殿がある。

(二) Olympia.

臺であつた。月桂樹を捧げたる青年の崇高の美、橄欖の木蔭に憩ふ勇士の面影も、南歐の自然を飾る唯一の繪卷がしのばれる。彼の哲人プラトー[一]の如きも、身體の美と力とに秀でたる一人であつた。

かくギリシャ民族は美の訓練に全力を傾注した。その全身筋肉の均齊と調和の美及び血色の美は競技運動の訓練によつて達成することができる。而してこの三者の內、心に流るる生命は、やがて五感の機能と結合してくる。そこに表出される喜怒哀樂の情は、我等の生命に觸れて藝術となる。

無限に伸びてゆく生命力は、適切なる競技運動によつ

(一) Platon. ギリシャの哲人。(紀元前四二四年—三四七年)

潤大

深閨 枯槁

て培はれてゆくものである。競技運動は以上の肉體的要素を訓練し得る可能性を有するものである。かくしてこそ身體諸機能は適度の活動をなし、十分なる營養と睡眠とをとり、日光に浴して新鮮なる空氣を呼吸し、氣自ら潤大となり、生命力はいやが上にも強まるものである。美の表現はかくしてこそ得られる。

深閨の處女が運動の不足による顏色憔悴、形容枯槁といふが如き身體に、如何に錦繡を裝うたとしても、美とは稱することができまい。

我が國過去の人體の美は、幾多の變遷をして來たが、均齊、調和の美、血色の美、生命力の美、健康の美などを經て來

(一)喜多川氏。江戸時代の浮世繪の大家。文化二年(二四六五年)歿、年五十三。

素朴

たものではなかつた。所謂(一)歌麿の畫きたる水柳の美で、衣服を脫せば、獸類に類すべき不均齊の美で、とても近代文化の光の中に持ち來るべき性質のものではなかつた。

これは最も素朴的の美であつた。もとよりこれは衣食住の生活條件より來たものであつたが、近代女性の生活は改善され、身體運動に自由なるものとなつたこの結果女子の身體は大なる發達をなすに至つた。國家の意氣、民族の發展の上に祝福すべきもので、健康の美もいやが上にも伸びてゆくであらう。

——安田弘嗣の文に據る——

一一　ローンテニス(二)

柳澤健(一)

深き緑と、もつるゝ微風と、
踊れるものよ湧きたつものよ。

足には輕き白靴を、手にはボールを、
覗ひ覗ひて、彼女の肩を。

ボールは強く右手にひゞく、
微風よ、微風よ、さゞめき立てよ。

白きライン(三)と白靴と、緑の芝生、風の舞、
ボールは彈き、一息にさゞめく風を切つて出づ。

(一)詩人。外交官。明治二十二年福島縣に生まれた。著は詩集果樹園。海港の外洋詩の飜譯及び紀行文が多い。
(二)Lawn-tennis.
(三)line.

白きネット(一)に燦爛と陽(ひ)は粉々(こなごな)の青と散る。
五月の黄金に塗れたるボールは跳る靴のそば。

子供は叫ぶ柵の外、
空には光る蝶の羽。

深き緑と、もつるゝ微風と、
踊れるものよ湧き立つものよ。

(一)Net.

(一)小說家。明治二十一年神奈川縣に生まれた。久遠の像。都會へ。幸福の國へ。我が小畫板等の著がある。

一二　男鹿半島

加藤武雄(一)

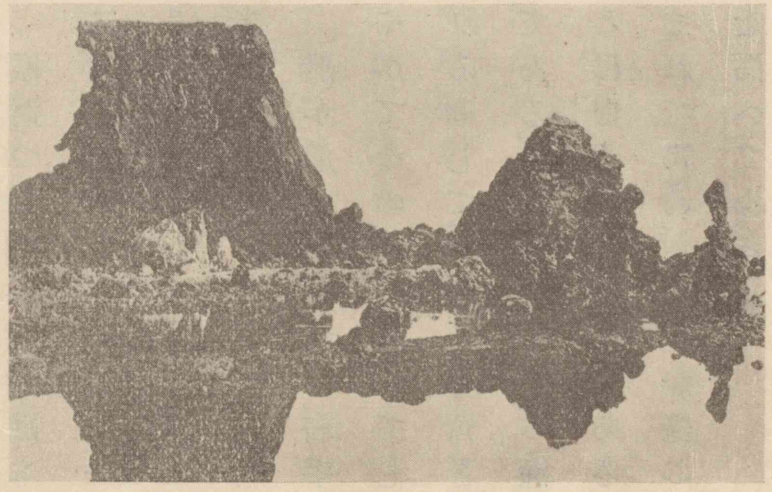
船川港の棧橋際の材木に腰をかけて待つてゐるうちに、島めぐりの舟の支度ができた。長さ二間ばかりのもので船頭が三人、二人が櫓を操つて一人は豫備に控へる。港口を防波堤近く出はなれた時、強い風がさつと吹いて來て、私の爲に設けてくれた日覆の布を危く奪ひ去るところだつた。今日は波が高い、と船頭がいふ。

防波堤から出てしまふと、なるほどかなり波が高い。船は時々大搖れに搖れる。えつしえつしと聲を合はせて漕ぐ二人の船頭の赤銅色の顏からは汗が滴り落ちる。

(一)Concrete.

振返つて見ると、港はもう遠く背後になつて、丘陵の懷に抱かれたその全景を、一枚の繪のやうにして見せてゐる。海岸のコンクリート(一)の堤防が日を捕へてきらきらと光つてゐる。

船が進むにつれて、右手に一つの岬角が現れだす。港はやがてその蔭に隱れてしまう。岬角が岬角につづいて現れる。そして、岬角と岬角との間には、小さな漁村が隱されてゐる。屏風の如くその漁村をとり圍む斷崖は、あるところは白く地肌を現し、あるところは燃えるやうな綠に包まれてゐる。何の花か綠の中に赤く燃えてゐるのも風趣を添へてゐる。



男鹿半島その一

「いゝなあ。ちよつとあゝいふところは。」と私がその漁村の一つを指していふと、舳の方に坐つてゐた控への船頭が「なあんのいゝことが――。」と、力強く否定して、今はともかく、冬になると、北からの吹雪が直接に吹きつけて、それはそれは大變だといふ意味のことを、食肉鳥の鳴く聲を思はせるやうな甲高な調子

で早口にいふ。

その船頭はなかなかおしやべりで、あれこれと、指しながら、いろいろ話してくれるのだが、どうも言葉がわからない。それに波が高いので、やゝもすれば言葉が波の音にとられてしまふ。錯雜した岬角は益々頻繁に現れては隠れ、隠れては現れる。もう漁村などはない。もう一つ廻ればいよいよ島が見えはじめるといふあたりの、岬の鼻に船をとめて、岩の蔭に日を除けながら、船頭たちと一緒に用意の辨當をたべる。午後二時頃である。港からここまでおよそ二時間かゝつたわけだ。

やがて陸に引沿ふやうに船を進めて、その岬角をぐる

りと一廻りまはると、前面に一つの平つたい島が現れた。あれはおばけ島といふのだと、代り合つて休んでゐる無口の船頭が教へる。遠くから見ると大きく、近づくに従つて小さくなるからさういふのだといふ。なるほど、近づくにつれて小さくなる。小さくなるのではない。幾つもの小さい島いや、島といふよりも岩礁に分裂するのである。この邊から島といつても皆岩礁なのだが、それがちらほら見えだし、斷崖の姿も次第に面白くなる。

斷崖の裾から走り出した岩礁が、やがてとぎれとぎれに尖端だけを水上に浮かべて、蒼い波の上に眞直な黒い點線を引いてゐるのがある。船はその點線を横ぎつて進

崔嵬

む。

船が進むにつれて、景色は益〻面白くなる。牛の横たはるが如く、狗の走るが如く、といふやうな漢文句調ででもなければ、とても形容しきれないいはゆる奇巖怪石のさまざまなやつが崔嵬として、また突兀として、絶壁の裾に群がり立つてゐる。その中に龍ケ岩といふのがあつた。ピラ

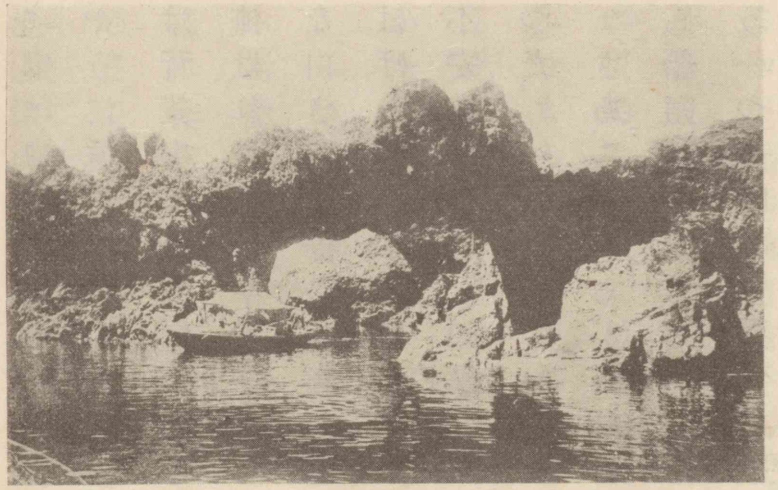
男鹿半島その二

ミッド型の大きなもので、鑛滓色の肌には、小さな松などがところどころに生え、裾の方には貝殼が一ぱいくつついてゐる。頂上には鳥の糞が積つてゐる。高さは五六丈ばかりもあらうか。龍が頭を振りあげたやうな形をしてゐるそのてつぺんのところに、枯草見たやうなものが一とかたまりくつついてゐるのを見つけて、何かと聞くと、「みさごの巣だ」と船頭が答へた。

岩礁を嚙んで波は躍りあがる。その邊へくると、船の動搖は非常に激しくなる。船にしがみついて貪るやうに眺める。ここへ來て、初めて眼が覺めたやうな氣がする。眼が覺めるといへばその海の色だ。海の色は濃い紫色

をしてゐる岩礁は概ね鑛滓色をしてゐるが、中には炎のやうに眞赤な色のがある。そしてそれ等林立した岩礁には背景をなす斷崖のある部分は、燃えたつばかりの綠に掩はれてゐる。紫、赤、綠そして岩裾を嚙む波頭の雪のやうな白さ。それ等の色彩が强烈な眞夏の日に輝いて、しかもはげしく搖れる船の中からは、上に下にいり亂れながら不安な錯雜した印象となる。宛として未來派の畫面であつた。

さあ、これからが面白い、といふ意味のことをいひながら、船頭はえつし、えつしと一際聲を張りあげる。そしてもう一つの岬角を廻つて、少し進むと斷崖に沿うて、今まで



男鹿半島その三

のよりは一際大きな岩礁が三つ四つ立つてゐて、岩礁と斷崖との間は、狹い水道をかたちづくつてゐた。船はその間に漕ぎ入れられた。その水道は、瀞のやうに靜かで深藍の水には、綠草に掩はれた兩方の崖が廣く倒影を沈めてゐる。その綠の影の中に、白くほのめくものがある。眼をあげて見ると、崖の上の草むら

の中に、白い花が二三輪咲いてゐた。多分百合の花だつたらう。

二三町ほどの水道を渡つてゆくと、今度は岩礁の中間が辛うじて船を容るるに足るだけの洞門にくりぬかれてゐるのにぶつかつた。大棧橋といふのである。

その次が高雀の窟である岸の斷崖に深くゑぐれ込んだ洞窟、疊なら十疊も敷けようといふ大きな洞窟である。船頭たちは、そこでちよつと躊躇してゐたやうだが、やがて思ひ切つたやうに、舳をその窟に向けた船ははげしく搖れる。半分ほど入れかけるとまた一つ大きく搖上げて、その拍子に舳を強く岩壁に打ちつけてしまつた。

「今日はいけねい」と、船頭は殘念さうにいつた。私は眞暗な洞窟の中をそつとのぞき込みながら、その奥の方にぴたぴたと鳴つてゐる波の音に耳を澄ました。

大棧橋、高雀の窟、男鹿半島の勝はまづこれまでである。そこから少し行くと、もう岩礁の奇はつきる。然し私はこの絶壁がやがて綠の草に掩はれながら、見上げる眼もかすむばかりの高みまで、大佛の背のやうな圓みを以てつづいてゐたそのなだらかな感じを忘れることができない。そして、一體どこをどうして來たものであらうか、その中腹のあたりに白い手拭を冠つた女が二三人しきりに草を刈つてゐた。その豆人形のやうな姿を、その女たちの歌ふらしい幽かな唄の聲とを忘れることができない。

そこから船を返した。歸りは追風に帆を孕ませて船は滑るやうに走つた。船川の港について船からあがると、もう黄昏はあたりに迫つてゐた。

——我が小晝板——

一三　草津より澁へ

若山牧水[一]

案内者は六十近い老爺であつた。見るからに好人物らしいのが先づ私の心を輕くした。昨日までの日和下駄を草鞋に代へて出掛ける。午前六時だつた。

この窪地の溫泉町[二]を出外れると、すぐ落葉松林に入つた。道は廣大な高原の傾斜と共に、斷えず輕い登りとなつ

(一)歌人。名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。別離、くろ土、旅とふる郷、比叡と熊野等の著がある。

(二)草津溫泉を指す。群馬縣の西北部。

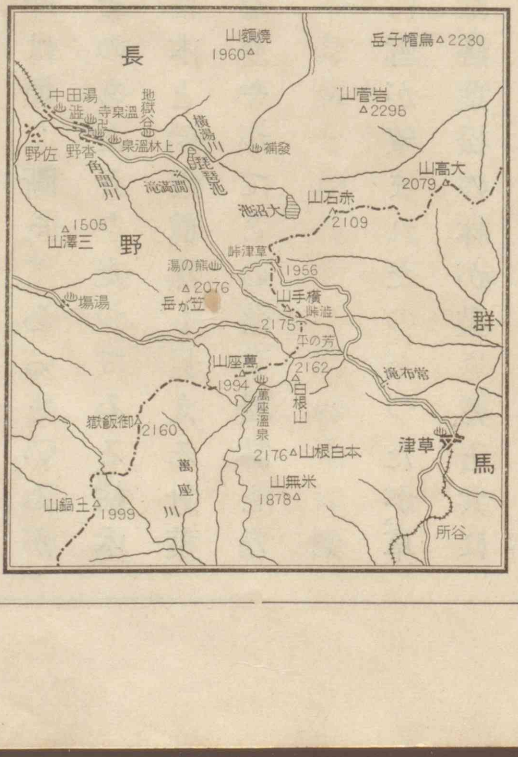
てゐた。限りなくつづいた落葉松の高さは、一間半から二間ある。土地が寒いので瘠せてはゐるが、樹齢はこれでも既に三十年を越えてゐるだらうと案内の老爺はいつた。すべて官有林であるとのことである。そしてこの落葉松林の中には、この林の枯枝を拂ひ、下草を刈ることによつてのみ生活を營んでゐる人たちが棲んでゐるといふ。

郭公が啼いてゐる。こひしい聲であつた。朝曇のうそ寒い空には雲が低く垂れて、はてのないこの落葉松林を掩うてゐる。その間でたゞ一羽啼いてゐるのであつた。初めはやゝ離れたあたりで啼いてゐたのが、次第に聲が烈しくなり、私たちの歩いて行く近くに啼き移つて來た。そし

敏捷

て四五町さきの、たけの低い林の梢から梢を飛ぶ姿までをりをり見え出した。案外に大きな鳥である。僅かに芽を吹いた林のうす青い上を、すれすれに飛ぶ餘り敏捷でないその姿は、耳近く聞くその聲と共に、あはれに寂しいものであつた。

落葉松林の次第登りになつた傾斜のはてに、全部白々と見える枯木の原が私の注意を引いた。それは針のやうに一本一本が眞白く立並んでゐるのである。何年前



(一)群馬縣西北境の火山で、三國山脈の西南端に噴出したものである。海拔二一六二メートル。

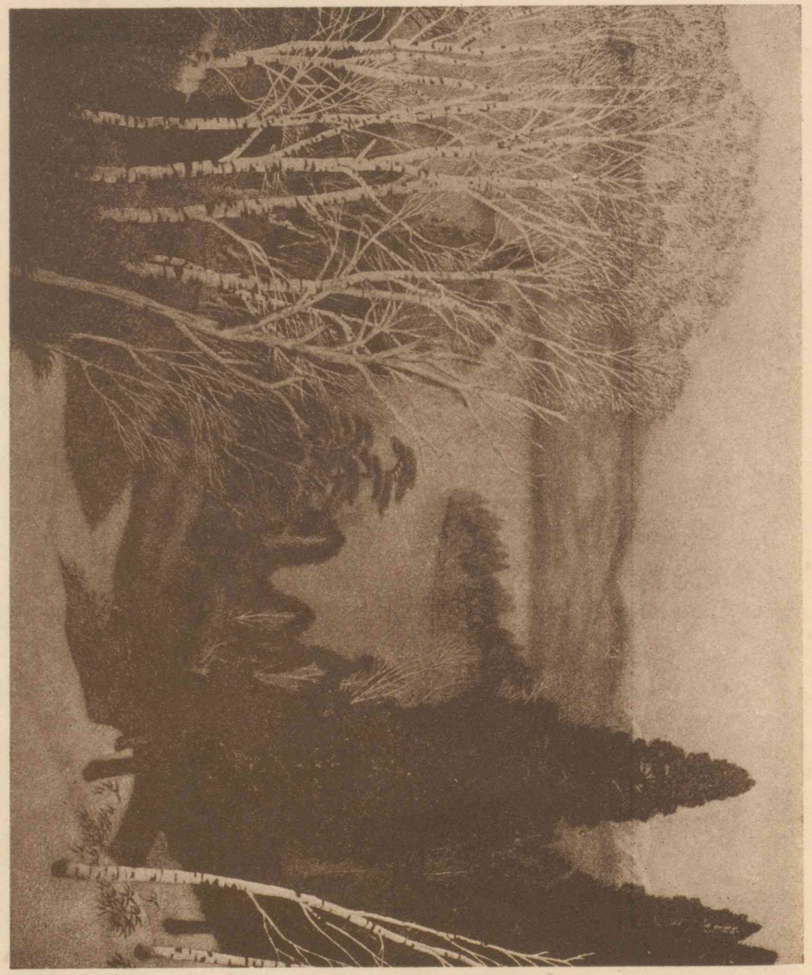
かの(一)白根山噴火のあとだといふ。その枯木林につづいて、山は次第に灰白色となり、薄い代赭色となつて、そこに鋭い白根山の頂上が見える。今は煙も斷えてゐるといふが、脚早い薄雲が煙のやうにそのあたりを走つてゐる。枯木林から少し下つては、白い枯木と殆ど眞黒く見える針葉樹との相混つた廣い林となり、やがてこの落葉松林となつてゐるのである。

それらの林のそここに雪が望まれたのだつたが、草津から一里半も來た頃には、落葉松の林が盡きると共に、私たちの脚もとに、埃によごれたそれの大きな塊が、ぼつぼつと見えるやうになつた。いつもさうしつけてゐるらしいとある場所にくると、老爺は道からちよつと傍にそれて、

「ここで一服やつて行きませう。これから上は雪になりますでね。」

さういひながら、負つてゐた荷をおろして、岩の上に腰を掛けた。薄日が雲を漏れてきたないそこらの雪の上に射して來た。私も老爺の側に行つて腰をおろした。

曇つてはつきりとは見えないが、そこからはよく遠見が利いた。淡い光を宿した雲から雲の間に並び立つてゐる遠い山の影は、昨日草津までの途中で見たより、更に廣く、更に遙けく展開して眺められた。何といつてもそこか



高原の春

野澤蓼洲筆

らは淺間[一]が最もよい。高山に登らねば高山の姿はわからぬといふ。輕井澤[二]や小諸[三]あたりから見馴れた淺間とは思はれぬくらゐ秀れた高さ、大きさを持つて、中空に聳えてゐるのである。晴れるとその向ふに富士も見えるといふ。日光の具合か、上野下野方面の山々は多く雲にかげり、越後境の連山は、その輝いた積雪と共にはつきりと見渡された。この年老いた案内者は、どれを尋ねても殆ど判然と山の名を知つてはゐなかつた。

眼を落すと、海拔四千五百尺の高さを以つて誇つてゐる草津溫泉が、遙かな眼下の高原の一點にほの白く見おろされたそのあたり一帶は草野に似た落葉松の原がつ

(一)群馬縣吾妻郡と長野縣北佐久郡とに跨がる活火山。頂上は常に硫煙を吐いてゐる。海拔二五四二メートル。
(二)(三)共に長野縣北佐久郡。

原始的

間斷もなく

づき、少し登つての右手には、枯木と眞黒な老樹との混つた荒れはてた原始的な山林がゆるく浪打つた山肌なりに廣々と起伏してゐる。曇つてゐるだけに却つてこの手近な一廓の眼界は、或沈んだ明瞭さを以て見渡された。その明るく澄んだ原野のどこでか、たゞ一つの例の郭公の啼いてゐるのが聞える。地を打つやうな斷々なその聲は、聲から聲を逐つて、少しの間斷もなく、眼下の廣大な窪みの中から起つてゐるのである。

その寂しい聲を耳に殘して、ほどなく私たちはそこを去つた。そしてとある山の背を廻つて、今までとは異つた方角の一つの境界に面することになつた。それと共に雪

も多くなり、雪と土とを半々に踏んで歩くやうになつた。その道から右手向ふの澤にずつと打開けて眺められた森林は、思はず私に驚きの聲を揚げさせたほど見事なものだつた。そこには噴火の時の影響が全く無かつたらしく、少しも荒らされたあとがなく、昔ながらの森のまゝに深々と靜もり茂つてゐるのだ。やはり眞黒く見える針葉樹林で、老爺に聞くと、栂、樅、があらなどの樹木から成り、所所さうじの木の落葉した白い梢がうつすら赤みを帶びて混つて見えた。さうじの木とはあとで白樺の方言であることを知つた。があらとは梅によく似た木で、土地の者はこの木で專ら箸を作つて職としてゐるといふ。その老

木の黒い葉や枝は、全く曾て見たことのないほど鮮かな深い艶を帶びて私の眼に映つた。殊にこの大森林を美しく見せるのは、その森林全體の地面におき渡して、朽葉がくれに見えてゐる雪である。雪もまた地の露出した場所に凍てついてゐるのより、遙かに淸らかに見えた。この見事な森は、私たちの通りかゝつてゐる山腹の根方の廣い澤全體を埋め、更に遙かに延びて向ふの峰まで及んでゐる。さつき郭公の啼いてゐたあたりの荒れた森といひ、この茂つた森といひ、共に私としては生まれて初めて見る種類のものであつた。

その森を眺めながら、或澤の雪の傾斜を登りかけて、ふ

いと老爺は立止つたが、今私たちの立つてゐる足の下の雪の深さは十間からあるだらう、そして七八間の下の深い所に、橋が埋つてゐるのだといひ出した。今年は三四十年目の深い雪であつたさうだが、それにしても餘りの事に、私は舌を卷いた。その澤を通り過ぎて、芳の平といふ所に出た。そこで白根山の噴火口道、及び(一)萬座山中の萬座溫泉に行くべき道は分れてゐるのださうだ。そして眞夏にでもなれば茶店が出るとのことであるが、今はたゞ一面の雪の原である。仰いで見る噴火口の赤茶けた山嶺には相變らず雲が忙がしく流れてゐた。その芳の平には二つの小さな池があつて、近年までは浮島が浮いてゐたとの

(一)群馬縣吾妻郡にある。白根山の南方。

ことである。その側を通り過ぎて少し行くと、急に山が嶮しくなつて、あたりが一面の森となつた。雪はいよいよ深くなつて、全く地の影など見ることができなくなり、栂だの、があらだのの枝や幹が、雪の中から折れ傷んで現れてゐる。

今までにもさういふ所があつたが、そのあたりからは全然道路といふものを見ることができなくなつた。そして案內の老爺は、單に自分の見當を賴りに、栂や、樅の梢の出た雪の上を、どこといふこともなく登つて行くのだ。これも生來初めての經驗なので、私は初めは浮れ心地に面白がつて登つて來たが、山が次第に嶮しく、遠くも近くも

嚴肅な氣持

すべて雪に掩はれた森の中に入るに及んで、おのづと一種の恐怖に捉はれ始めた。恐怖とまでは行かなくとも、一目見るにも、一歩踏むにも、少しもゆるがせにせぬ嚴肅な氣持である。

思ひがけなくここで杜鵑の聲を聞いた。ちやうど霧のやうな雲が、私たちの周圍を掠めて走つてゐる時であつたが、可なり離れた方角で、全く突然に、しかもあわたゞしい聲で啼き始めた。その聲のした方を振返つて見ると、山つづきの向ふに、同じく雪が一面になだれて、壁のやうに嶮しく聳えたあたり、黒い縞を成して、樹木が亂れ立つてゐる。そのあたりから、その鳥の聲は落ちてくるのであつ

(一)群馬縣と長野縣の國境をなしてゐる。海拔二一七五メートル。

た。老爺のあとにつきながら、五尺八尺と、老木の梢ばかりが現れて靡いてゐる雲の山腹を歩むこと半道ほどで、漸く峠に出た。この澁峠(一)は草津から三里で、澁までは四里あるとのことである。

峠には風があつた。今まで歩いて來たのとは反對の溪間から雲のちぎれが頻りに舞上つてくるのであるが、それでも峠の附近僅かな平地には、薄々とした日が射してゐた。以前あつたといふ茶屋のあとが、幸に風をよけ、日を受けてゐるので、そこに虎杖の枯枝を折敷き、更にござを敷いて、晝飯の席を作つた。時計は十一時であつた。

私たちの坐つてゐる山の背は、恰も信州と上州との國

境に當つてゐることを知つた。坐つて左手に見やる山から山は上州、右手に見おろす雲がくれのそれらは信州の峰である。風の當るせいか、それとも日光の爲か、私たちの坐つた附近の木の根かたなどには、ほんの僅かばかり雪が解けて、地面の現れた所がある。そしてそこを微かな水が流れてゐる。氣をつけて見ると、その微かな木の根の雪解の水も、或ものは上州に向かつて流れ、或ものは信州の方へ淸らかな筋を引いてゐるのであつた。

歩いてゐるうちは汗をかいてゐたが、暫く休んでゐると寒さのきびしいのがわかる。とにかく風もひどい。十分に休みもせず、飯を終へるとすぐ出掛けた。

雪は更にこの方の側に深かつた。しかし下り坂なのと木が少いのとで、今度は老爺より先に立つて、兩手を振りながら驅出したりした。が、中には怖い所があつた。何百間か何千間かの高い斜面の雪が、眞中どころに多少のふくらみを帶びてなだれてゐる。そのふくらんだあたりを、横に切つて通るのである。身體を斜にして、一歩一歩その大斜面の雪を抱くやうにして通り過ぎた。

一里半も雪の中を下つて、一つの打開けた澤に出た。そしてそこに草津を出てから初めて一軒の小屋を見た。例のがあらの木で箸を造る者の住んでゐる小屋である。知合と見えて、案内の老爺は、私を誘つて小屋の中に入つた。

中には一人の痩せこけた男が、大きな爐に榾を焚いて木屑の中に坐つてゐたが、やがて煮立つた鑵子から澁茶を酌んでくれた。

もうその澤には雪は無かつた。澤といつても、山の一部が平坦な高原をなしてゐるやうな所で、土地が瘠せて畑地にはならず、夏場だけここに馬を放して牧場にするのだといふ。暫く疲れを休めて小屋を出た。

私たちの歩いてゐる溪の向ふ一帶は、一面の深い白樺の林で、その下に竹が青々と伸びてゐた。白樺はいづれも二丈三丈といふ風に大きく伸びたものである。幹の方は眞白で梢にかけては葉を吹くに間近なせいか、薄赤みを

参差

帶びて細かく繁く枝を交してゐる。うち仰ぐ山の半面が殆ど全部その白樺の森で、参差として立ちこんでゐるのである。この木の森で、かうした見事なのを見たのも生まれて初めてであつた。この林の若葉の頃や黄葉の頃はさぞかしと思ながら飽がず眺めて通り過ぎた。

幕岩、蒸岩など附近の名勝となつてゐる珍しい大きな斷崖の下を、溪に沿うて下つて行くと、琵琶池といふ山中の池としては可なりに大きな池があつた。先日來つづいた雨の後で、澄んだ水はいつぱいに湛へ、岸の落葉樹の林の影を明らかに映してゐた。このあたりでもまだ海拔四千六百五十尺からあるといふ棒杭が建ててあつた。それ

を過ぎてなほ下ると、道の左手に振返つて望まれる偉大な瀧があつた。潤滿瀧といふ。「高さ三百九十尺、幅六十二尺。」と認めた路傍の棒杭はともあれ、とにかく珍しい瀧らしいので、道からそれて見にはいつた。

瀧の懸つてゐる所から下の溪は、兩岸とも何十尺かの深い斷崖となつて切れこんだまゝ、ずつとつづいてゐるので、瀧の下あたりに近づいて仰ぐことはできない。岸の斷崖の一部に遠望する場所が造つてあつて、そこから三四町の間隔をおいて望むのである。暫くは崖の上に横になりながら、この珍しい瀧を眺めて時を過した。

そこから杉の植ゑこまれた山と山との間の急な坂を

下りて、ほどなく上林（一）（かんばやし）溫泉の横を過ぎ、一つの橋を渡つて家の建てこんだ澁（二）溫泉に着いた。そして津端屋といふのに草鞋を解いたのは正に五時であつた。

——牧水全集——

（一）長野縣吾妻郡。澁の東方。
（二）長野縣吾妻郡。澁峠より西北四里。

自修文

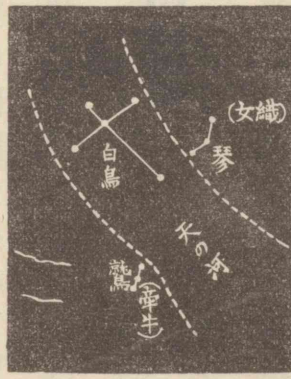
天の河

山本一清（一）

天の河は、月の明るい夜には全く消えてしまふやうな薄い光の帶でありますが、月のない夜にはその眞の壯大さが十分に表れます。その幅の、或はせまく、或は廣く、光の程度も濃淡さまざまで、長く南北につづく有樣は、全く洋々たる大河の流を見るやうです。燦爛たる星のまたゝきも、さながら漣のやうに思はれます。

（一）天文學者。理學博士。京都帝國大學教授。明治二十二年滋賀縣に生まれた。星座の親しみを始めとして天體に關する著書が多い。
洋々たる　ひろびろしたさま。

あゝ神祕な天の河。何故にこの不可思議なものが天に横たはるのか。これは實に昔からいづれの國人もが抱く、一つの深い疑問でありました。機械力のない昔の人は、この雄大なる河筋が、すべての星と同じ歩調で、晝夜・四季の運行をするといふ事實を知つただけで、その本體を見破ることはたうていできませんでした。



天の河

十七世紀の初、新學の開拓者として、世界を驚倒させた偉人ガリレオ(一)は、望遠鏡を用ひて、始めてこの千古の謎を解いたのでした。ガリレオが用ひた望遠鏡は今から見れば眞に憐なものでありましたが、それでも天の河は一つ一つの微星の密集團であることが疑なく認められました。おゝ、

神祕　不可思議ではかり知れない事。
運行　めぐりまはつて進行すること。
開拓者　新にはじめた人。
(一)Galileo. 伊太利の大天文學者(西暦一五六四—一六四二)

あの壯大な光帶が、全く微小なる星の集合であらうとは!大なる疑問は解けて、ここに大なる驚異が生まれました。

ガリレオ以來今日まで、天文家は繰返し繰返し天の河を觀察しました。その中でウイリアム・ハーシェル(一)が最も偉大なる效を擧げました。ウイリアムは、天の星の數を數へ盡して、始めて天のすべての星數が、天の河へ近づけば近づく程增加し、その極端に增したものが天の河そのものであるといふことを知つたのであります。然らば、星は何故に、天の河に向かつて集中してゐるのでせうか。ウイリアムの說によれば、吾人の知つてゐるこの大宇宙は、幾千萬といふ星の集合團體で、その集合の形は、略〻平板上に擴がつた物と考ふるべきである。そして我が太陽系は全體のおよそ中心に位置を占めてゐることになつてゐる。この平板上に集つた全體の形を、奧行の長い方に深

(一)William Herschel. 獨逸の大天文學者、物理學者。(西暦一七三八年—一八二二年)
宇宙　天地四方。
太陽系　太陽とこれを中心として運行する諸星を合せた稱。

く透視したものが、我々からは天の河と見えるのであらうといふことです。ウイリアム以後今日まで、多くの學者は繰返し、天の河とその中にある星の並び方を研究しましたが、やはり大體の觀念は、今もウイリアムの考と變りませぬ。

夏の夜、空を眺めながら、古い昔の天文のことを考へ、また遠い宇宙の果を思ひうかべながら、天の河を見るのも人間ばなれのした面白いものであります。天の河を見るのに、澄切つた夜の肉眼の眺も壯大な感じでありますが、雙眼鏡のある方は、それで以て天の河のあちらこちらを御覽になりますと、星の集り方の多少や、輝き、濃淡の區別なども一層はつきりとしまして、それだけ宇宙そのものに接近したやうな、雄大なる自然界に新しい友達を得たやうな喜ばしい心持になります。

(一) 詩人。畫家。名は誠。明治二十一年東京に生まれた。詩集路傍の花。温室の花等の外に、現代藝術講話等の著がある。

一四　朝は晴れたり

川路柳虹(一)

朝は晴れたり、友よ立て、
空ははるかに色澄みて、
高き思に曇なき
聖者の眸しのばしむ。

朝は晴れたり、口すゝぎ、
この曉の生まれゆく
空のさなかに神ありと、
静かにおもへ、汝が胸に。
日に照らされて煙るもの。

ほめ歌

遠き山なみ、町の屋根、
今、勞動のほめ歌の
叫とも聞く汽笛の音。
朝は晴れたり、いざ立たん。
我等恃むはみづからの
營みつくる力のみ。
いざわが路を踏みゆかん。

(一)詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生まれた。詩集邪宗門、思ひ出等の外、多くの童謠集、民謠集等の著がある。

(二)八丈島の南方百八十浬。東京府下。

一五　正覺坊

北原白秋(一)

麗かな麗かな、何ともかともいへぬ麗かな小笠原(二)の初夏の一日である。宮の濱の白い弓形の渚から、影の青いバナナ畑の方へたどり上る小徑のそば、小灌木林の境界線に近く、一本の光り輝く護謨の大樹が高く高く搖めいてゐる。その下に正覺坊が仰向に轉がされてゐるのである。たゞそこにいつから轉がつてゐるともなく、轉がされてゐるから、たゞ轉がつてゐるといふ風である。大きな正覺坊が、ゆつたりと、眞圓い卵色の腹の甲羅を仰向けて、たゞ轉がつてゐる。無論四肢は固く結はへられてゐる

のでその鰭を動かすことさへ自由でない。圖體は大きいし、二條の太い荒繩までがぐるぐる卷に卷附けてある。それでなくとも、一旦轉がされたが最後、一日かゝつて起返るか、二晩かゝつて起きられるか、この大樣なのろのろの海龜の身では、何だか頗る怪しいものである。嬉しいのか、悲しいのか、苦しいのか、またはたうとう諦めはててしまつたのか、これぞといふ氣ぶりも見えない。たゞ首を當りまへに出して、當りまへに目をあけてゐる。そして何のこともなく空を見入つてゐる。尤も、それも仰向いてゐるから、目が空に向いてゐるといふだけである。澄みわたつた明るい天の景色を見つめてゐるといふのか、または麗か

な雲の往き來や、風の流に恍惚と思を凝らしてゐるといふのか、それとも碧瑠璃な大海の響、檳榔、椰子、バナナ、種々な熱帶の植物の匂を現心もなく嗅分けて、懷かしい生まれの海の波のまにまに靈魂を漂はしてゐるのか、何が何とも譯のわからぬ夢見るやうな眼をあけてゐる。

小笠原の正覺坊

時は正午である。初夏といつても小笠原の初夏は暑い。太陽は直射し、いよいよ護謨の大樹の眞上から強烈な光

の嵐を浴びせかけると、燦爛たる護謨の厚葉が、枝々に限りもなく重り合つて、眞青な油ぎつた反射を、影と共に空一杯に搖めかす。その葉を潛つてくる光線は、鋭い原色の五色である。それが幹に當り、下に寢てゐる正覺坊の腹を燒きつける。さうしていよいよ綠と黃との點々に模樣づけられた綺麗な海龜の頭が、軟かな雜草の上に更に艶々と光り出し、麗かな何ともかともいへぬ空のあたりで檳榔の葉が戰ぎ、鶯の鳴く聲が聞えてくる。

十方無碍光、澄輝く白金寂莫世界のひと時である。

正覺坊は眩しさうに目をあけたり閉ぢたりしてゐる。現心もないらしい。たゞゆつたりと轉がされてゐるので

轉がつてゐる。大安心のかたちである。恐らく自分が囚はれの身であることとすら忘れてゐるに違ひない。

微風がをりをり護謨の枝々を戰がして去つた。幹の中ほどに一流れ流れた海の美しさ。向ふに(一)兄島が見え、麗かな麗かなその瑠璃色な海峽を早瀨に乘つて、白い三角帆を上げた獨木船が走つて行く。さりながら正覺坊にはその海が見えない。頭を海の方に向けては寢てゐるが、背後には護謨の樹の幹があり、名も知れぬ廣い葉の草の叢がある。たゞこの島の四方八方を取圍んでゐる太平洋の波のうねりが、どこからともなく緩い調節を間のびに折疊んでゐる。それだけはさすが正覺坊の痴鈍な感覺にも、稍

(一)小笠原列島中の一。

何らかの響を傳へるらしい。正覺坊は目を瞑つて、また目を開いた。

コケッコッコ、コケッ。……コケッコッコ、コケッ。……物に驚いた鷄の鳴聲が、丘の下の農家の方から聞えてくる。畑の甘蔗やバナナの葉蔭を分けて、こちらへ逃げてくるらしい。一羽、二羽、それが次第に近づくにつれて、鳴聲を潜めてくる。かと思ふと一羽の雄鷄が、やがてロスタン(一)のシャントクレ(二)のやうな雄姿を現した。白い舶來種の雌鷄が、何かを啄きながらついてくる。そのとたん、奇怪な大きい正覺坊の圖體が、ふいと前に轉がつてゐるのが目についた。と、忽ち驚きの叫を立てて、ケケッコッ、ケケッ、ケケッコッ、ケケッ、ケケケと逃げて行く。そしてまたひとしきりせはしさうな叫聲が甘蔗の向ふから聞える。

正覺坊はそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大空を見上げてゐる。溫和さうな空色の瞳が艶々と潤みをもつて、たゞぢつと麗かな天の景色に見入つてゐる。恐らくは傍に何事が起つたかも知らないであらう身動きひとつしようとしない。

——白秋小品——

(一) Rostand. フランスの劇詩人。(西暦一八六八年—一九一八年)

(二) ロスタン作動物寓喩劇シャントクレ(Chanteclér)の主人公の雄鷄の名。

一六　花の思出

吉村冬彦(一)

晝顏

いくつくらゐの時であつたか、確かには覺えぬが、自分

(一) 理學博士。東京帝國大學教授。本名は寺田寅彦。明治十一年高知縣に生まれた。冬彦集。藪柑子集等の著がある。

宵闇

が小さい時のことである。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて、半町くらゐ上ると、川は左に折れて、舊城の裾の茂みに分入る。その城に向かつたこちらの岸に、廣い空地があつた。維新前には藩の調練場であつたのが、その頃は縣廳の所屬になつたまゝで、荒地になつてゐた。

近邊の子供はここを好い遊び場所にして、柵の破れから出入してゐたが、咎めるものもなかつた。夏の夕方は、めいめいに長い竹竿を肩にして、空地へ出掛ける。どこからともなく、澤山の蝙蝠が蚊を食ひに出て、空を低く飛交はすのを、竹竿を振つてはたゝき落すのである。

風のない烟つたやうな宵闇に、蝙蝠を呼ぶ聲が對岸の

言知らぬ　宵の口　欝然

城の石垣に反響して、暗い川上に消えて行く。「蝙蝠來い。水飲ましよ。そつちの水にがいぞ。」とあちらこちらに聲がして、時々竹竿の空を切る力ない音が、ひゆうと鳴つてゐる。賑やかなやうで、言知らぬ寂しさが籠つてゐる。蝙蝠の出盛るのは宵の口で、遲くなるに隨つて、一つ減り、二つ減り、どこともなく消えるやうにゐなくなつてしまふ。すると子供等もちりぢりに歸つて行く。後はしんとして、死んだやうな空氣が廣場を鎖してしまふのである。いつかねぐらに迷うた蝙蝠を追つて、荒地の隅まで行つたが、ふと氣が付いて見ると、あたりには誰も居らぬ。仲間も歸つたか聲もせぬ。川向ふを見ると、城の石垣の上に欝然と茂つた

名狀のできぬ

榎が闇の空にもの恐しく擴がつて、汀の茂みは眞黑に眠つてゐる。足を擧げると、草の露がひやりとする。名狀のできぬ暗い恐しい感じに襲はれて、夢中に驅出して歸つて來たこともあつた。

　廣場の片隅に高く小砂を盛上げた土堤のやうなものがあつた。自分等はこれを天文臺と名づけてゐたが實は昔の射的場の玉避けの迹であつたので、時々砂の中から長い鉛玉を掘出すことがあつた。年上の子供はこの砂山に攀登つては滑り落ちる。時々戰爭ごつこもやつた。賊軍が天文臺の上に軍旗を守つてゐると、官軍が攻登る。自分もこの軍勢の中に加るのであつたが、どうしてもこの砂

胸に巢をくふ

山の頂までは登ることができなかつた。いつもよく自分をいぢめた年上の者等は、苦もなく驅上つて、上から弱蟲と嘲る。「早く登つて來い。ここから東京が見えるよ。」などといつて笑つた。悔しいので懸命に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と賴む晝顏は脆くちぎれて滑り落ちる。砂山の上から賊軍が手を拍つて笑つた。しかし、どうしても登りたいといふ一念は、幼い胸に巢をくつた。或時は夢にこの天文臺に登りかけて、どうしても登れず、もがいて泣き、母に起され、蒲團の上に坐つてまた泣いたことさへあつた。「お前はまだ小さいから登れないが、今に大きくなつたら登れますよ。」と母が慰めてくれた。

執着

その後、自分の一家は國を離れて都へ出た。執着のない子供心には、故郷のことは次第に消えて、晝顔の咲く天文臺もたゞ夢のやうな影を留めるばかりであつた。二十年後の今日、故郷に歸つて見ると、この廣場には町の小學校が立派に立つてゐる。大きくなつたら登れると思つた天文臺の砂山は取崩されて、もう影も形もない。たゞ昔のまゝを留めて懷かしいのは、放課後の庭に遊んでゐる子供等の勇ましさと、柵の根本に枯れ枯れに咲いた晝顔の花とである。

凌霄花

小學校時代に一番嫌な學科は算術であつた。いつでも

算術の點數が惡いので、兩親は心配して中學の先生にお願ひして、夏休中先生の宅へ習ひに行くことになつた。

宅から先生の所までは四五町もある。宅の裏門を出て、小川に沿うて少し行くと、村はづれへ出る。そこから先生の家の高い松が、近邊の藁屋根や植込の上に聳えて見える。これに凌霄花が下から隙間もなく絡んでゐて美しい。

毎日晝前に母から注意されて、いやいやながら出て行く。裏の小川には、美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて搖れてゐる。その間を小鮒の群が白い腹を光らせて時時通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つては小川へはいつて、ぼちやぼちややつてゐる。附木の水車をしかけて

生籬

ゐるのもあれば、盥船に乘つて流れて行くのもある。自分は羨ましい心を抑へて、川沿ひの岸の草をむしりながら、石盤をかゝへて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬をめぐらした冠木門をはいると、玄關の脇の坪には、蓆を並べた上によく繭が干してあつた。

玄關から案内を乞ふと奥さんが出て來て、「暑いのによう御精が出ますねえ。」といつて、座敷へ導く。綺麗に掃除の屆いた庭に臨んだ緣側近く、低い机を出して下さる。先生が出て來て、默つて床の間の本棚から算術の例題集を出して下さる。横に長い黄表紙で木版刷の古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み、乙は一里半

を歩む……」といつたやうな題を讀んで、その意味を講義して聞かせて、「これをやつて御覽。」といはれる。

先生は緣側へ出て欠伸をしたり、勝手の方へ行つて、大きな聲で奥さんと話をしたりしてゐられる。自分はその問題を前に置いて、石盤の上で石筆をこつこついはせて考へる。座敷の軒先に投網が釣下げてあつて長押のやうなものに釣竿が澤山掛けてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追ひつくかといふことが、どうしてもわからぬ。考へてゐると頭が熱くなる、汗が坐つてゐる脚ににじみ出て、着物のひつつくのが心持が惡い。頭を抑へて庭を見ると、笠松の高い幹には、眞赤な凌霄花の花が暑さうに咲

いてゐる。

よい時分に先生が出て來られて「どうだ、むづかしいか。どれ。」といつて、自分の前へ坐られる。羅紗切を丸めた石盤拭で隅から隅まで一度拭いて、そろそろ丁寧に説明して下さる。時々「わかつたか。わかつたか。」と念をおして聞かれるが、大方それがよくわからないので、妙に悲しかつた。俯向いてゐると水洟が自然に垂れかゝつてくるのを、ぢつと堪へてゐる。いよいよ落ちさうになると、思ひ切つてすすり上げる。これも辛かつた。晝飯時が近くなるので、勝手の方では皿鉢の音がしたり、物を燒く匂がしたりする。腹の減るのも辛かつた。繰返して敎へて下さつても、結局あ

まりよくわからぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くされることがあつた。それが妙に悲しかつた。「もうよろしい。又明日お出で。」といはれると、一日の務がともかくもすんだやうな氣がして、大急ぎで歸つて來た。宅では、何も知らぬ母がいろいろ涼しい御馳走をこしらへて待つてゐて、汗だらけの顏を冷水で淸め、ちやほやされるのがまた妙に悲しかつた。

常山木の花

まだ小學校に通つてゐた頃昆蟲を集める事が友だちの間ではやつた。自分も母にねだつて蚊帳の破れたので捕蟲網を作つてもらつて、土用の日盛にも恐れず、それを

肩にかけて毎日のやうに蟲捕に出掛けた。蝶や甲蟲類の一番澤山棲んでゐる城山の中をあちこちと永い日を步き暮した。二の丸、三の丸の草原には珍しい蝶やばつたがゐる。少し茂みに入ると、樹の幹に、さまざまの甲蟲が見つかる。玉蟲、こがね蟲、米搗蟲などがゐた。強い草木の香にむせながら、胸を躍らせて、こんな蟲をねらつて步いた。捕つて來た蟲は、熱湯や、樟腦で殺して、菓子折の標本箱へ綺麗に並べた。そしてこの箱の數の增すのが樂みであつた。

いつか城山のずつと裾のお濠に臨んだ暗い茂みにはいつたら、一株の大きな常山木があつて、桃色がかつた花が梢を一面に蔽うてゐた。散つた花は風に吹かれて、汀の

泥舟に美しく散らばつてゐた。幹にはところどころ蟲の食入つた穴があつて、穴の口には細い木屑が蟲の糞と共に零れかゝつて、臭氣が鼻を襲うた。幹の高い所に、大きな、見事な兜蟲がいかめしい角を立てて止まつてゐるのを見つけた時は嬉しかつた。自分の標本箱にはまだ兜蟲のよいのが一つもなかつたので、胸を轟かして網を揚げた。少し網が屆きかねたが、やうやううまく捕れたので、腰につけてゐた蟲籠に急いで入れて、包みきれない喜を抱いで森を出た。三の丸の石投の下までくると、向ふから美しい蝙蝠傘をさした女が子供の手を引いて樹陰傳ひにくるのに逢つた。傘を持つた手に藥瓶をさげてゐた。子供は

大きな新しい麥藁帽の紐を、かはい頤にかけて眞白な服を着てゐた。自分のさげてゐた蟲籠を見つけると、母親の手を離れて覗きに來たが、眼を圓くして母親の方へ驅けて行つて、袖をぐいぐい引つぱつてゐると思ふと、また蟲籠を覗きに來た。母親が「早くお出でよ。」といつても、なかなか自分の側を離れない。無理に連れて行かうとすると、道の眞中にしやがんでしまつて、たうとう泣出した。自分はその時蟲籠のふたを開けて、兜蟲を引出し、路端の相撲取草を一本拔いて、蟲の角をしつかり縛つた。そしてさあといつて子供に渡した。子供は泣止んできまりの惡いやうに嬉しい顏をする母親は驚いて子供を叱りながらも禮

をいつた。自分は何だかきまりが惡くなつたから、默つて空になつた蟲籠を打ちふりながら驅出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな、かつて覺えない心持がした。その後たびたび同じ常山木の下へも行つたが、あの時のやうな見事な兜蟲はもう見つからなかつた。

——藪柑子集——

一七　自然の復讐

丘(一)淺次郎

人類の最も誇りとするところは自然を征服し得たことである。文明といひ野蠻といふも、畢竟自然を多く征服し得たか、少く征服し得たかの相違に過ぎない。火を以て隨意に物を燒き、野獸を捕へて家畜とし、雜草を養つて作

(一)動物學者。理學博士。東京高等師範學校名譽教授。明治元年靜岡縣に生まれた。進化論講話、生物學講話、煩悶と自由等の著がある。

物としたのも、皆自然の征服であつたが、十九世紀に至つて自然の征服が急に盛んになつて、鐵道を敷いて大陸を征服し、巨船を浮かべて海洋を征服し、更に二十世紀に入つては飛行機を飛ばして天空をも征服するに至つた。水を用ひて燈を點じ、炭を燃やして氷を造るはもとより、電波を使役して遠距離の間にも自由に通信し、エッキス放散線を利用して人體の骨骼をも寫し、また血清を製造して微細な病原生物を征服してゐる。かくて人類は自然を征服し得たことを何よりの手柄と考へ、文明の進んだことを大いに得意として、今後も益〻競つて自然を征服しようと努めてゐる。

謳歌

然しここに一つの疑問がある。自然は果してかやうに人類に征服せられるのみで、敢てこれに對して復讐を企てるやうなことはないであらうか。我々が自然を征服し得たと思つて得々としてゐる間に、白蟻が堂や寺などを食弱らせるやうに、見えないところで絶えず自然が仇返しをしてゐるやうなことはないであらうか。このやうな問題は今日の人類を標準とし、今日の世の中だけを見、目前の勝利に心を奪はれて、たゞ文明を謳歌してゐる人たちには、恐らく胸に浮かぶことさへないであらうが、遠く人類の過去の歴史を考へ、下等な獸類時代、猿時代、野蠻時代、半開時代を經て、遂に現今の有樣に達したまでの變遷

の跡を探る時は、この問題に對して確かに然りと答へる外に途はないやうに思はれる。

自然には一定の理法があつてこれを破るものを必ず罰せずには置かない。例へば人間の住所なる陸地について考へて見ても、森林の樹木を猥りに伐拂つて山を坊主にすれば、雨水を一時吸收し貯蓄する爲の自然の裝置がなくなるから、雨降りのつづく度毎に洪水が出て、家を流し橋を落すに至る。小鳥類を

啄木鳥の害

濫獲

自業自得

濫獲してしまへば、昆蟲類の繁殖を制限する自然の働き役がなくなつて、忽ち害蟲が殖え、作物の收穫が著しく減じ、場合によつては皆無となる。また海岸の森を伐倒した爲に魚の望んでくる蔭がなくなり、漁期にも魚が獲れず、近邊の町が衰微したといふやうなこともある。製造所から汚物を川へ流し出す爲にその先の海で蝦や海苔ができなくなつて、土地の人々の產業が絶えるといふこともある。これ等はいづれも自然の理法を無視した爲に自然から罰を受けたのであつて、全く自業自得といふの外はない。かやうな過は今日までどこでも隨分數多くあつたであらう。また今後も時々あるであらうが、これは知識の

先見の明

足らぬ爲、先見の明のない爲に起つたことである故、人智の進むと共に追々同じ過を避けることもでき、すでに過つたことはこれを償つてその結果を取消すことも全く不可能ではない。人類の征服に對する自然の復讐としてはこれ等は最も輕い程度のものである。

生物には絶えず鍛へる體部は強く丈夫になり、常に蔽ひ保護せられるところは次第に弱くなる性質がある。これは自然の理法の一であつて、寄居蟹の頭や鋏が堅いのに反し、介殼に蔽はれた腹部の皮が薄く柔かなのもその爲であるが、人間の身體も無論この規則に洩れない。然るに人間は自然を征服し、自然力の一部を隨意に使役し得

るやうになつた度毎に、これによつて自己の身體を大切に保護して來たから、征服の重なる毎に人間の身體は少しづつ弱くなつた。火を用ひ始めたことは文明の第一歩であつて、人類開化史の第一ページに特筆大書すべき自然の征服であるが、物を煮て食ふやうになつてからは人間の消化器は著しく弱くなつた。食物を煮て食ふ動物は人間以外には一種もなく、人間ほどに齒や腸胃の弱い動物も人間以外には一種もない。衞生の書物を開いて見ると、生水を飲むと危險だから必ず一回煮沸したものを用ひよなどと書いてあるが、未だ火を用ひなかつた頃の人類の先祖は、他のすべての動物と同じく、無論煮沸しない

水を平氣で飲んでゐたので、それが今日かやうな注意を要するやうになつたのも、畢竟するに、長い年月の間に、人間の腸胃が弱くなつたからである。衣服を着して寒氣を防ぐことも他の獸類と異なる點として人の誇るところであるが、その爲人類の皮膚はだんだんと弱くなつた。人間のやうに僅かばかりの寒暖の變化によつて、容易に風を引く獸は他に恐らくないであらう。家屋を建てて寒暑を防ぎ、市街を造つて安全に住居することは、すべての文明の礎ともいふべきことであるが、その爲、日夜惡い空氣を吸つて、呼吸器官が次第に弱くなつて來た。人間が暖房管を備へ、煽風器を据付けて、どんな冬の寒さでも、どんな

普遍的

夏の暑さでも我が智力を以て防ぎ得ぬものはなからうと誇つてゐる間に、自然はこれに對する復讐として、日夜の別なく人類の體質を根抵から弱くする。かうしていつも極めて隱微に行はれるから、普通の人はこれに氣が附かぬが、人間の仕事の一時的、部分的、表面的なのに反し、自然の仕事は永久的、普遍的、根抵的である故、その結果は極めて恐しい。そして一般の學者等が騒ぎ出すほどに結果の現れる頃は、すでに手後れで、容易に恢復の見こみは立たぬのである。

(一)江戸時代の儒者。名は君美。享保十年歿、年六十九。藩翰譜・讀史餘論・折たく柴の記等三百餘種の著がある。
(二)正親町天皇の御代(二二四八年)
(三)徳川家康。
(四)駿府。今の靜岡市のこと。
(五)徳川家の重臣。三河の人。寶永四年(二三六七年)歿、年八十二。

一八　板倉勝重

新井白石(一)

天正十六年(二)徳川殿(三)駿河の國府(四)に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひ、(五)板倉勝重をばここの町奉行に任ぜられぬ。

初め勝重を召され、この職のこと仰せ下されしが、その任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更にお許なく、勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ふものと謀りてこそ、御返事を申すべけれと申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありなん、罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべきことありとて告知らする人あり。い

ほくそゑむ
餘の儀
奉行
かなふべからず
おこと
堪へ堪へじ

かなる幸か候。」といひけるに、勝重ものをもいはず、ほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て座になほり、妻にうち向かひ、「さればけふ召されしこと、餘の儀にあらず。このたび御座所を移さるゝに依りて、かの町の奉行たるべき由を仰せ下さるゝいかにもかなふべからざる旨を辭し申せど、お許なし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことはいかに思ふ。」といふ。妻は大いに驚きて、「あなあさまし。わたくし事などならば、夫婦謀るといふことこそあれ。公にてかゝることとやのたまふべき。ましてこれは仰せ下さるゝところなり。殊にその職に堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候ふべき。」といへ

本朝
訴を斷る
賄賂
理を判つ
苞苴

ば、勝重「いやいや、我この職に堪へ堪へじは、我が心一つのみにあらず、御身の心によることにてはべるぞ。まづ心を鎮めてよく聽き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行、頭人などといはるゝものの、その身を失ひ、その家を亡さぬは稀なり。或は内縁につきて、訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因りて、理を判つこと私多し。これ等の災は婦人より起るところあり。我若しこの職奉らん後は、親しき人の言寄らんことなりとも、訴訟のこと執り給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候ふことありとも、苞苴のもの受け給ふまじきか。これ等のことを初として、おことは勝重の身の上、いかなる不思議のことありとも、差出て、もの

畏まる
もぢる

のたまふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずることは、いかにもかなふべからず。さればこそ、御身と謀るべしとは申したれ。」といふ。妻つくづくうち聽きて、「誠にのたまふところ理にこそはべれ。みづからはいかなる誓をも立てなんとく參りて、畏まらせ給へ。」といふ。勝重大いに悦びで、神にかけ、佛にかけて、堅き誓たてさせて、「この上は思ひ置くことなし。さらば參らん。」とて、衣裳ひきつくろひて出づ。袴の後腰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、「袴のうしろ惡しく候。」といひて、立寄りて直さんとす。勝重聞きもあへず。「さればこそ、わが妻に謀らんと申せしは過たざりけれ。勝重が身の上のこと、いかなる不思

怠狀まゐらす

議ありとも、差出でものいはじと誓ひしは、今のほどぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職承ること かなふべからず。」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠狀まゐらす。「さらばその言葉、いつまでも忘れ給ふな。」といひて、御前に參る。德川殿「いかに。汝が妻は何といひし。」と仰せければ「妻にて候ふものが、愼みて承れと申しはべる。」と申す。「さこそあらめ。」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。

―藩翰譜―

明治天皇御製

さし昇る朝日のごとく爽かに
もたまほしきは心なりけり

輩出

數寄

(一)第百十九代光格天皇の御代。(二四五一年)

怜悧

一九 太田垣蓮月尼

蓮月尼は近世の有名なる歌人にして、これを平安朝に輩出せし幾多の才女に比するも、その詩才に於て、必ずしも遜色ありと言ふべからず。況やその一生涯は數寄に富みて、おもしろき節あるに於てをや。

尼は寛政(一)三年に生まれ、幼名をお誠(のぶ)といふ。父は傳右衞門光古とて、京都知恩院の廣間侍なり。お誠は天性怜悧にして、最も和歌を善くし、且つ文章も人に優れ、筆蹟さへも麗しかりしかば、兩親の寵愛一方ならざりしが、その母はお誠の幼き頃世を去りぬ。

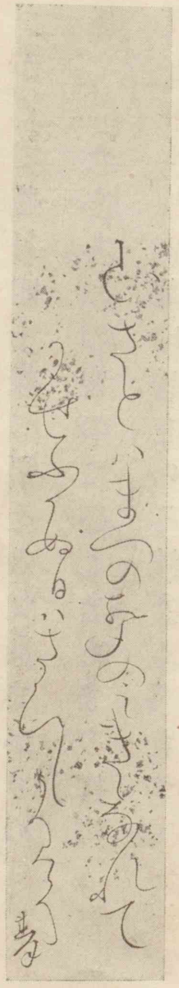
妙齢　貞淑　宿世の業　夭折　あたら法名

かくて月移り歳逝きて、お誠は妙齢に達せしかば、江州彦根の近藤何某を迎へて婿となせり。親に仕へて至孝なるお誠は、夫に對してもまた貞淑なりしかば、父子、夫婦の間頗る圓滿なりき。とかくする中に、傳右衞門は初孫を抱きて、年來の憂を忘るゝ身となれり。かくて夫婦の間には四人まで子を擧げたり。さるにいかなる宿世の業かありけん、四人の子はいづれも夭折せり。一家の悲歎言ふべくもあらず。加ふるにお誠三十三歳の厄年といふに、その夫また病に罹りて歿せり。四人の子を先立てたるだにあるに、その夫にさへ後れしかば、お誠はいたく浮世の無常を感じ、あたら緣の黑髮を切捨てて、法名をば蓮月と呼べり。

世をはかなむ　落膽

山さとはまつの聲のみきゝなれてかぜふかぬ日はさびしかりけれ　蓮月

もとより世をはかなみし身なれば、頭を圓むるにつゆためらふべくはあらねど、かくては老先寂しき父のいかに落膽もやせんと、殊更髮を剃落さずして、たゞ切下となし、且つ法衣をも身には着けざりしかど、心のみは眞實の尼



蓮月尼筆

法師となりて、深く深く人をも世をも思ひ捨てつ。

されど周圍の人は蓮月を捨てざりき。卽ちその容色の極めて勝れたるより、或は再婚を勸むるものあり、或は入夫を申しこむものありて、その煩はしさに堪へざりけれ

節操

たらちね

音をのみ泣く

圓頂緇衣の沙門

ば、蓮月は秤の錘もて、我と我が上下の前齒をば悉くこぼち去りぬ。この恐しきふるまひによりて、尼の強き決心と堅き節操との知られければ、これより後は、絶えてさることと言ふもののなきに至れり。

かくて蓮月四十歳の頃、その父身まかりぬ。

たらちねの親のこひしきあまりには
墓に音をのみ泣きくらしつゝ

といふ歌は、この時詠みけるなり。父の存命せるばかりに尼姿とならずありけるが、今はその父も世を去りければ、ここに始めて純然たる圓頂緇衣の沙門と様をば變へつ。もとより貧しき身の、尼となりてひたすら佛に仕ふる

ひさぐ

(一)京都市の東部。今は岡崎公園を中心としてその附近。

(二)藤原俊成の子。和歌及び書をよくし、百人一首を撰した。仁治二年（一九〇一年）八十歳で歿した。

のみを許さざれば、蓮月はなりはひのたづきにとて、陶器を製造する術を覺え、それに自作の和歌を燒きつけてひさぎしに、いたく世人の愛づるところとなりて、「蓮月燒」の名忽ち世に高まりぬ。この頃は岡崎(一)に住みければ、その歌にもこのわたりの景色を詠ぜるもの多し。

冬畑の大根の莖に霜さえて
あさ戸出さむし岡崎の里

都ばかりにはあらで、蓮月の名の諸國に弘まるに連れて、弟子入りを志願する人の多かりけれども、蓮月は「敷島の道には、定家(二)以前には師匠取りといふことはなかりき。たゞ古歌の心を以て師とせられよ。」とて、これを辭みけり。

すさび

(一)京都府愛宕郡大宮村西鴨。

されどなほ煩さく申込むものの絶えざりければ、彼方へ移り此方へ引越し、同じ所に二歳とは住まざりけり。因りて誰言ふともなく、「屋越の蓮月」とあだ名するに至りぬ。

浮雲のそこにここにとたゞよふは
きえせぬまでのすさびなりけり

と詠じしはこの時なりけり。而して最後に洛外西鴨(一)なる神光院の境内に庵を結びて、移り住みぬ。

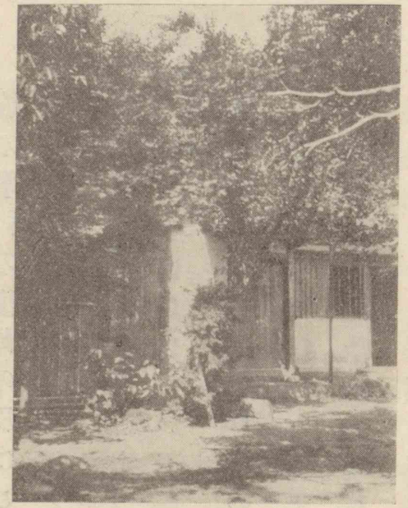
露の身をたゞかりそめに置かんとて
くさひきむすぶ山のしたかげ

かくて明治八年二月八日、八十五歳を一期として、大往生を遂げぬ。

辭世　人倫　貞操　鑑　欽仰

願はくは後の蓮の花の上に
くもらぬ月を見るよしもがな

これその辭世なり。家集を「海女の刈藻」といふ。



蓮月庵

蓮月尼の一生は、人倫の際遇に於て極めて不幸なりき。されどその貞操の正しく、道心の堅かりしは、後の世の婦女子の鑑とすべく、特にその和歌に至りては、得易からざる天才として、とこしへに欽仰すべきなり。

——田中嘉三郎の文に據る——

自修文

お茶の客

(一)土岐善麿

娘の學科の復習の爲に、この二月ばかり、毎日午後通つてきてくれたKさんが、お八つの時に、「近頃お茶を習つてゐます、なかなか面白いものです。おうちでもおやりになりませんか。」とすゝめた。

僕も、父の生前、よくお茶の客があつて、「お前もお坐り。」といつて人數に加へられたものである。よく手前もわからず、たゞ足がしびれて難儀であつた。もはや二十幾年も前のことである。

それは青い粉を、茶碗の中で、茶筅といふさゝらのやうなもので、しやしやしやとかき廻して、あぶくを飲むあれだつたが、今度のKさんのは(二)花月庵流とかいふ煎茶で「ちよつと簡單にできますし、ぢき覺えてしまひますから。」といふのである。

(一)歌人、東京朝日新聞調査部長。明治十八年東京に生まれた。歌集萬物の世界。雜音の中より等の外朝の散歩等の隨筆及びローマ字詩歌集がある。

茶筅 ひき茶をたてる時の具。

(二)花月庵鶴翁を始祖とする煎茶の一流儀。

「お茶などを習つてゐるどころではありません。何しろお客が來て玄關に出てゆくと、お留守ならば奥さんにでもお目にかゝりたいと言はれて、本人よりも先方に赤い顔をさせるやうな生活ですものね。」と妻は笑つてゐたが、Kさんは熱心で「ともあれ一度御覽に入れませう。道具を持つてまゐりますから。」といふことになつた。

ちやうどそのあくる日は日曜、Kさんは鬱金木綿の包を一抱へ持つて來た。「二階の八疊、かういたしませうか。」とKさんは襖寄りに並行して座をつくる。先づ取出した三尺に二尺ばかりの絨氈みたやうなもの、そのぼつてりとした紫紺色が疊に置かれると、すぐ一種いひやうのない靜けさを四邊にひろげて、もう氣がおちついてくる。

Kさんはつゞいてひよろ高い素燒の爐を正面に据ゑた。は

市松　市松模様。ごばん縞をうち違へて黒と白と並べたもの。

はあこれか、支那の畫などによくあるが、これは面白い。盆、水さし――箸を立てるものと布巾をいれるもの、この二つの陶器は小さくて、その藍色がいかにも快いものだ。

「どつさり持つてまゐれないものですから、ほんの略式だけを。」とKさんは道具の少いことを斷つて、水の用意などをする。妻もいつか市松の上張りをとつて、臺所から上がつて來た。僕が右の端に座ると、つゞいて、近所なので呼寄せた妻の姉、子供たち、妻などの順序で、一度のお客は五人といふことである。

お茶といふと、一概に窮屈で、うつかりものをいつてもいけないやうに思はれてゐる。餘り眞面目になつてゐると、何かをかしくなつた時は堪らなくなる。妻も内々それに閉口してゐたのだが、禮式も何も知らないものが初めて「お客」になつたとすれば、たゞ自由にする外はない。

「どうせ略式ですから、お寛ぎになつて。」

とKさんは言つて、やがて始まることになつた。

「Kさんは敷居のところへ膝をついて、「一煎さしあげます。」とあたまを下げた。どうもかう改まつてくると、をかしくなりさうである。それをぢつとこらへてゐると、心は却つていつか靜かな世界へと入つてゆく。Kさんは立つて、左手に水さしを、右手に水こぼしを持つて、兩方を左の傍にまとめて、そ、そ、そ、と歩を運んだ。その形がまたをかしくなりさうで、それもまたこらへきると、益ゝ心は靜かになつてゆく。爐の前に坐つたKさんは、やがて炭取りから小さく切つた炭を摘み上げて、爐の中に置いた。これから何をするのかと思つてゐると、Kさんは、二寸四方位の、小さな芭蕉の葉か何かで編んだ團扇を右手の指の間に挿んで、柄を長くさし延ばして、輕くぱたぱたぱたと爐の口

不得要領　どつちとも意味のわからぬこと。

感歎詞　物に感動した時に覺えず發する詞。

荒茶の湯　一定の茶の湯の式によらないで、自分勝手な方式をいふ。

をあふぎ始めた。爐の口がいやに大きいところへ、この團扇の小さいのと、それをあふぐ手つきとが變にをかしくなつて、いよいよたまらなくなつた。

「ははあ。」

僕はいきなり吹出すところを、この不得要領な感歎詞でおさへた。一つは先刻から女連が堪らなくなつてゐるのを察したので、同じやうに靜かな世界へ導かれつゝ、さすがに女同志の遠慮から、笑つてはすまないところへてゐたらしいのを、この時僕の思ひがけなく洩らしたやうな聲の方にこのをかしさを移させて、一座を寛がせようとしたのである。

「講談にある荒茶の湯の形だね。」

「お靜かでいいものですね。」

と、妻の姉はKの方に言つた。

「はあ」とKさんはうなづいたまゝぱたぱたぱたをつゞけてゐる。

まづ火を起してから水を湧かす。このぶんではお茶一杯がなかなかいたゞけさうもない。

「時間はどのくらゐかゝるものですか。」

と、僕は朝のうちつぶれてしまふ覺悟できいてみた。

「まづ三十分でございますね。」

「ははあ、火の起るのがですか。」

「いゝえ、一煎が――一煎と申しますとお茶三杯で、初めからしまひまで三十分ぐらゐとしてございます。」

「ほう、三十分で濟むのですか。しかし火を起すのが大變でせう。」

僕の家庭では瓦斯ばかり使つて、平生火鉢にも炭をつがない

から、ぱたぱたたは一通りならぬ事業と思つたのだが、もう見るまに、純白な小さな急須の水は沸々と沸いてたぎり始めた。案外早い。

「このたぎり方が、むづかしいのだと申します。初は魚の眼(一)、それから蟹の眼(二)になるのださうでございますがね。」

「魚の眼に蟹の眼。」

五歳になるみな子が、母の膝のそばで唱歌のやうなことをつぶやいたのでみな笑つた。

急須が沸くと、おろして膝の前の盆の上に置いたKさんは、手早く蓋をとつてその中へ一塊の茶を投込む。

「かうして入れますと、お茶はいくら飲んでも胃を痛めませんさうです。」

小さな茶碗に一たらしづつ注ぎわけて、それを僕の前から次

(一)湯珠の漸く大きくなつて浮かんでくるもの。
(二)湯珠が一層甚しく躍りあがつてくるもの。

次にさし出された時いよいよ荒茶の湯の型でゆくほかなかつた。

「どう持ちますか。」

茶碗が餘り小さ過ぎるので、兩手の中に這入つてしまふ。右手にとつて、左手に支へて口のところへ持つて來たが、ほんの底の方に黃ろくあるだけで、二口半にも二口にも足らない。じつと飲みほしてみたが餘り呆氣なくて、どんな味がしたのか、どうも普通と違つたところがないやうな氣がする。勤先で、仕事の一片づき濟んだ後に、給仕が持つてくるのとはよほど違ふものの、この魚の眼、蟹の眼の水の味は更なり、どうもこの茶を、玉露(二)とも池の尾(三)ともわかるまでには一通りの修養ではないやうだ。とろりと舌の上に一滴ころがして、眼でもつぶつて味はふやうな暇もなく、鈍くなつてゐる私の味覺には、たゞ淡々

(二)(三)ともに上等の茶の名。

たるばかりである。二杯、三杯――かうして一煎は終つた。

「どうぞおよろしければ――」。

とＫさんは、今度は急須のまゝ僕の前へよこした。僕は舌のあひだの羊羹のしまつをつける爲に、もう一杯茶碗についで急須を次へ廻した。妻の姉も一杯ついで次へ廻したが、これで妻のところの茶碗には、もう急須の中に一滴も殘つてゐない。妻はからの茶碗を兩手にもつて、飲むやうな眞似をして變な顏をしてゐる。

「一杯には、ほんの少し注ぐのでございます。先刻差上げましたのも、ちと多いくらゐなので――」。

妻のところまで廻つてゆかなかつたことをＫさんは言譯らしくいつたので、僕は、

「僕が注ぎ過ぎましたね。どうもがぶがぶ飲まないと飲んだ氣がしませんね。」

一座はまた靜かに笑つた。

思へば珍しい日曜だつた。日曜には家族をすつかり散歩に出して、僕一人で留守番をすることになつてゐたが、お茶や謠曲の日曜も面白い。忙しい忙しいと、まるで人生に借りでもあるやうにあくせくと暮らす都市居住者が、こつねんと爐の前に坐ることも面白い。小さな芭蕉團扇の柄の先の方を指の間に挿んで、ぱたぱたぱた――この靜かな音を樂しむ心に徹したいと思ふのである。

あくせく　こせこせする。

二〇　秋ちかし

吉田絃二郎(一)

盂蘭盆がくれば、子供のをりの習慣からか、もう秋が來

(一)小說家。早稲田大學敎授。名は源次郎。明治十九年佐賀縣に生まれた。島の秋、小鳥の來る日、運命の秋等の著がある。

たやうな氣がしてならぬ。私たちの子供の頃は田舍ではあるし、何も彼も陰曆で營まれてゐたので、無論お盆になれば草山には萩だの女郎花だの桔梗だのといつた風な秋草が咲亂れてゐた。夜になれば天の川がいかにも鵲の(一)わたせる橋といふ古人の形容を裏切らぬほどに白く澄みわたつてゐた。

季節の變化はどうしても田舍にゐる人ほど強く感ずることができる。秋になつてもこの頃のやうな煙の多い東京ではほんとうな天の川を眺めることはできない。あの大地震(二)の秋だけは地上のすべてのものが破壞されたので、東京の空もいつになく美しかつた。恐らく江戸時代

(一)七夕の夜、天の川にかゝるといふ傳說の橋。
(二)大正十二年九月一日の關東大震火災をいふ。

にはあれ以上の美しい空をしてゐたであらう。廣重(一)の繪の江戸の空を見るとほゞ當時の空の色が想像される。

秋が近づいて來たことでなほ一つ感じるのは風の觸りである。風の音である。

秋を知らせる風の觸りはまた格別である。この秋近き頃の風の觸りだけは東京は特に懷かしいやうに思ふ。武藏野を控へてゐるせゐか、ともかく東京の秋風の感じは特別であるやうに思ふ。根岸、日暮里あたりの忘れられたやうな路地裏に木槿が咲き、日向葵が輝いてゐる。そこにも武藏野特有の秋の風が吹いてゐる。

二三年前の立秋の朝私は京都の五條あたりを步いて

(一)立齋廣重。江戸末期の有名な浮世繪師。

ゐたことがあつた。建仁寺[一]僧堂の托鉢僧たちがおうおうと經を讀みながら五條の大橋をわたつて來た。いかにも秋らしい感じであつた。今でも忘れることができない。

私はその日木津川[二]をさかのぼり、伊賀上野に芭蕉の故鄕塚を訪ねたことがあつた。

木津川に沿うた大和伊賀境の山村はいかにも繪畫的な落ちつきをもつてゐる。他に餘り類のないほどな感じのいい村々が山を負ひ川に沿うて連なつてゐる。國境の山には殊に桔梗が美しく咲いてゐた。

蓑蟲庵[三]の濡れ緣に腰をおろしてじつと秋の聲を聽いた心持は恐らくいつまでも私の胸に鐫みつけられてゐるであらう。秋風の吹くところでさへあればどこの山もどこの川もいい。

奈良もいい。高野もいい。信濃もいい。月寒(つきさつぷ)[一]の大陸的な牧場の秋は更にいい。牧草に埋もれて默々として羊を見まもつてゐる牧童の姿はすでに秋そのものである。

とりわけて私は武藏野の玉蜀黍畑の秋風を愛する。

千住大橋から眺めた葛西の一面の葦の原は秋風の頃は涙が出るほど尊いものであつた。あのあたりの葦の原も追々と失はれゆくのも寂しいことである。だが白い雲だけは今でもなほ取りのこされた葦の原の上に悠々として漂うてゐるのは嬉しいことである。

——わが詩わが旅——

（一）京都祇園の西南にある。臨濟宗五山の一。

（二）源を伊賀の山中に發し、後に淀川に入る。

（三）芭蕉の生國伊賀にある五庵の一。門人土芳の手で建てられた。

（一）北海道の大牧場地。

(一)歌人。詩人。明治十一年堺市に生まれた。歌集みだれ髪。渦卷等の外、新譯源氏物語等の著がある。

二一　新秋の歌

與謝野晶子(一)

初秋は來ぬ白麻の
明るき蚊帳に臥しながら、
夜の更けゆけば水色の
麻の輕きを襟近く
うち被くまで涼しかり。

上のわが子は二人づれ
おとなの如く遠く行き、
夏の休をみちのくの
山邊の友の家にゐて
けさ嬉しくも歸りきぬ。

(一)宮城縣。

休のはてにおのが子と
別るゝ鄙の親たちは
夏の盡くるや惜しからん。
都に住める仕合は
秋の立つにも身に知らる。

貧しけれどもわが家の
今日の夕食の樂しさよ、
黑川郡(一)の山邊にて
わが子が取れる百合の根を
わが子と共に味はへば。

(一)小説家。明治二十五年仙臺に生まれた。修道院の秋、返らぬ春等の著がある。
(二)支那本部の中央を東流する。世界第四の大河。延長約一千三百里。
おほどかな
(三)江蘇省にある平野。揚子江の下流。
蕭條
(四)大正十年。
(五)支那浙江省北部の開港場。
(六)支那江蘇省の都會。東洋のベニスといはれる。
(七)江蘇省西部の都會。蘇州の西北約五十里。

二二　揚子江[二]の秋　その一

南部修太郎[一]

廣くおほどかなその姿。黄泥の水悠々たるその流。自然の美と詩情豐かな江蘇[三]平野の蕭條たる秋の眺をほしいまゝにしながら、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今もなほ感慨深く思ひ浮かべる。それは四年前[四]の秋の半ばのことであつたが、杭州[五]に靜雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州[六]を訪ねて、城内から遠い城外のいくつかの史蹟を巡り、更に南京[七]を訪れて、荒廢した舊都の寂しい姿に、人事の悲しいはかなさを深く感じさせられた私は、その南京城外の下關から日清汽船會社の岳陽丸の客となつて、南支

寥落

那の最後の旅路を、上海へと下つたのであつた。

南京に過したその前日は、寥落の都にもふさはしい時雨模樣の曇日であつたが、それは一夜の中に名殘もなく晴れあがつて、その日は大陸の秋らしく、空は紺青深く澄みわたり、やゝ黄色みを帶びた日の光も、明るく朗かであつた。そして、赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口の町、振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐて、湖岸の蘆荻が靜かな風にさやさやと戰いでゐた。

「けふは珍しいお天氣です。」下關の宿屋から荷物をさげて、私を汽船發着所まで見送つてくれた若い支那人ボー

瀟洒

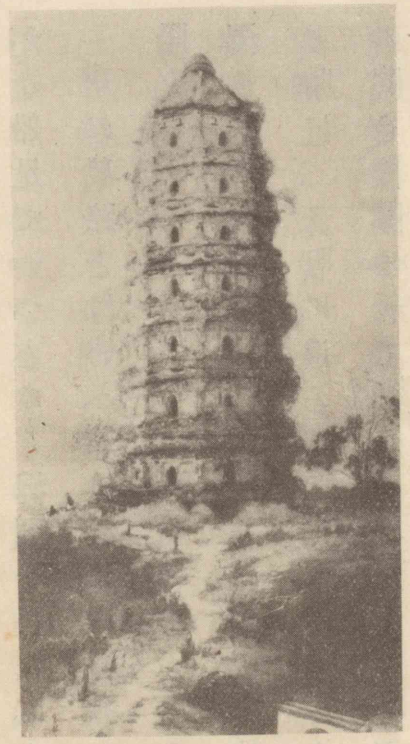
イは、達者な日本語でさう私にいつた。

流れてゐるのかゐないのか、殆どわからないやうな静かな水面を滑るやうにして、岳陽丸が上流の方にその瀟洒な姿を見せたのは、ちやうど正午時分であつた。私は埠頭階上の乗船口からすぐ船に乗りこんで、定めの船室に荷物を置いてくると、また上甲板に引返して、手摺によりながら、桟橋の方を眺めてゐた。そこには支那人ばかりの三等船客たちや、荷役を争ふ苦力たちが、卑しく騒がしくひしめき合つてゐる。そのぶざまさに思はず不快な氣持をそゝられた私は、視線をそらして、反對の甲板の方に足を向けながら、船の高みからすると、一層廣々と、一層明るく開けて見える江の景色に、うつとりと眺め入つてゐたが、ほどもなく鈍く尾を引いた汽笛が鳴響くと、船は緩やかな船足で、いつとなく埠頭を離れてゐた。

川の船路とはいへ、船は白塗の姿麗しい三千餘噸の岳陽丸である。そして、その大船を輕く波上に浮かべて、黄に濁る水靜かに流れ行く揚子江。川幅は時に五六町に廣がり、時に二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船はその間を機關の音も微かに、小搖ぎもせずに進み下つて行くのである。さすがに秋である。湖岸に美しく戰ぐ蘆荻も、ところどころうつすりと黄ばんでゐる。草を食む水牛の群。すくすくと群がり立つポプラ(一)の木。垂葉の緑深い楊柳

(一) Poplar.

の蔭に憩ふ牧童の姿。それ等はいづれも江岸の好ましい眺であるが、岸近く立つ丘陵の頂に時々見える苔むした、朽ち崩れたやうな古塔の姿は、いづれもその昔榮えては、またいつとなく亡びた帝王たちの豪華の夢を物語るものであらう。杭州の雷峰塔、蘇州の北寺の塔や虎丘の塔、上海郊外の龍華寺の塔などと、江蘇平野一帶にそれぞれさういふ傳説をもつ古塔の姿を、いくつとな



虎丘の塔（中村春揚筆）

く見ることができるが、殊に江岸に眺められるそれ等は、今も昔も變りなく流れて行く長江の水に對して、人事のはかなさ寂しさを、感じさせずにはおかない。

二三　揚子江の秋　その二

五十哩ほどを四五時間に下つて、船が南岸の鎭江(一)に投錨したのはもう黄昏の頃で、江を流れる靜かな夕風も、なんとなく肌に冷やかだつた。私たち日本人の一等船客四五人づれは、船長の好意で船を下りて、鎭江の町を小一時間ほど散歩して、すつかり日の暮れおちた頃、また船に歸つて來た。西の方の空には三日月がかゝり、きらめく星影

(一)江蘇省の河港。南京から二里。

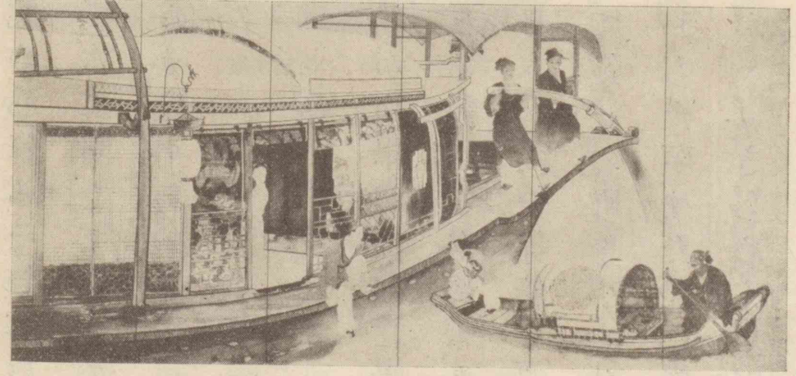
も美しく、江岸に沿うてぽつぽつと明りのついた鎭江の埠頭は、いかにも水鄕らしい、しつとりした眺であつた。

「あれが名高い金山寺(一)で、ずつと向うの山の頂に見えるのが甘露寺です。」船長はうつすりとした夕もやの彼方を指さしながら、さう説明した。

船はまたいつとなく埠頭を離れて、蕉山島(二)の影を左にしながら、靜かな波間を滑るやうに進んでゐた。私

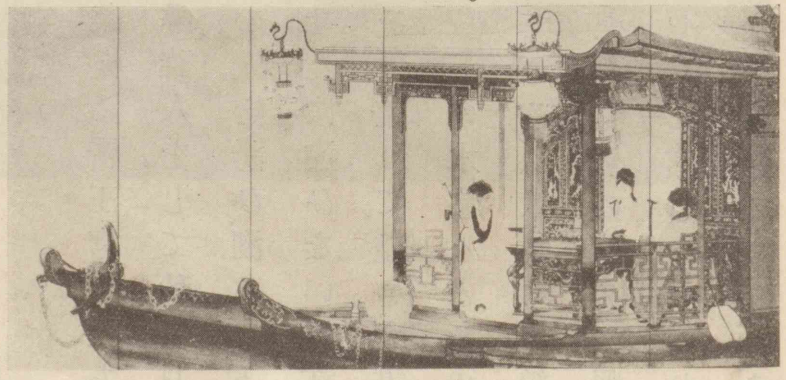
(一)江蘇省丹徒縣金山の上に在る。今は江天寺といふ。

(二)鎭江の東北。揚子江中に在る。



畫舫（小村大雲筆）その一

は甲板の手摺によつて、思はずも異鄕の旅人らしい感傷を誘はれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。颯々たる冷たい夜風。柔かな機關の響。靜かな船の蹴波の音。江の幅は次第に廣くなつて、岸邊の蘆荻も闇の中に吸はれてしまひ、三日月の影もいつとなく遠くの山の端に隱れて、空高き星の光のみひとりさえて、夜は漸く更けて行く。すべてはなんといふ感慨深い情景であ



畫舫（小村大雲筆）その二

宮嬪　畫舫　數奇　有爲轉變

つたらうか。

思へば有史以來三千餘年、或時は榮える帝王宮嬪たちの豪華な宴の畫舫を浮かべ、或時は醉詩人をして秋の月明を樂しませ、或時は傷ましい敗將の涙を誘ひ、溯る人下る人をして、數奇多樣な感慨を催させたに違ひない長江の水、人生のあらゆる有爲轉變もよそに流れて盡きず、盡きず流れて三千二百餘哩、今もなほ黃泥の水悠々と、その偉大な姿を私の眼前に蜿々と延べてゐる。私は暫く視線を伏せて、暗い水面に眺め入つてゐたが、自然の悠久に對して、人生の短さはかなさを今更のやうに感じさせられて、思はずまぶたのうるむを禁じ得なかつたのであつた。

甘露寺　中村春楊筆

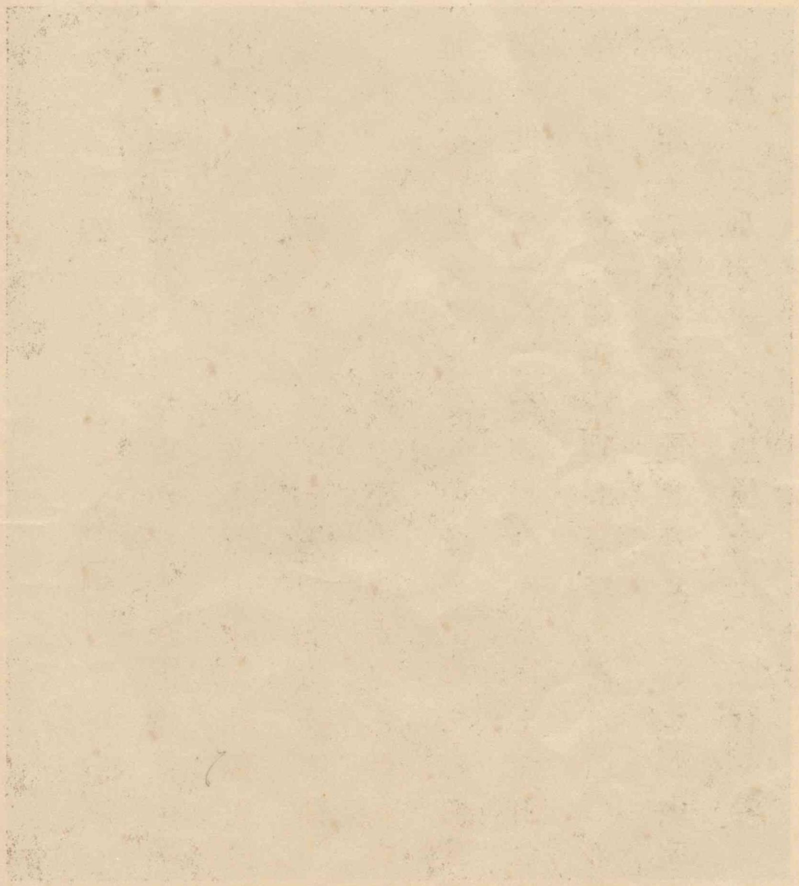
喬松

(一)三重縣飯南郡花岡村にある山。

爪先上り

二四　本居翁の遺蹟　その一

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺めゆく樂しさ。早稲田はすでに刈盡くしたが、晩稲田は金色に波立つて、豐年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生ぐらゐな小兒の連立つて行くのも、勇しく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐる疎(まばら)な小松原の道を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何「お墓はあそこの山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、いつか山室(一)に着いた。車を捨てて、爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を



流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には淸らかに珍しい。杉、松、椎などで小暗い路をやゝ四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い關係のある寺である。それから右へ左へと九十九折を喘ぎ喘ぎ六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪ぐらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、(一)平田篤胤大人の、

本居宣長

(一)秋田の人。宣長の弟子。天保十四年（二五〇三年）歿、年六十八。

占定す

なきがらはいづくの土になりぬとも
魂はおきなのもとに行かなん

と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に敎を受けられたことはない。しかも數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍つて居られるのは、さぞかし滿足なことであらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐる。

やま室の山に千年のやどしめて

かずまふ
卓絶

風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

もゝとせの世は隔つれど敎へ子に
かずまへませとおがみ額づく

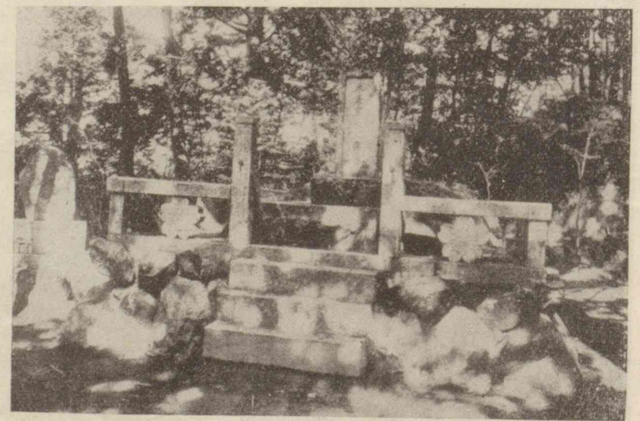
翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類が

見はるかす
(一)飯南郡。
卓越

ない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張等の崎々、山々、近くは松坂(一)町を眼下に見る。「富士の山もいつもはちやうどあのあたりに見える。」とホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。ここの眺望も誠に美しい。



本居宣長の墓

元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをりをりここに遊ばれ

鈴屋の翁　坂内青嵐筆

(一)鈴屋は翁の號。

遺愛のもの

稿本

舊態

たのである。

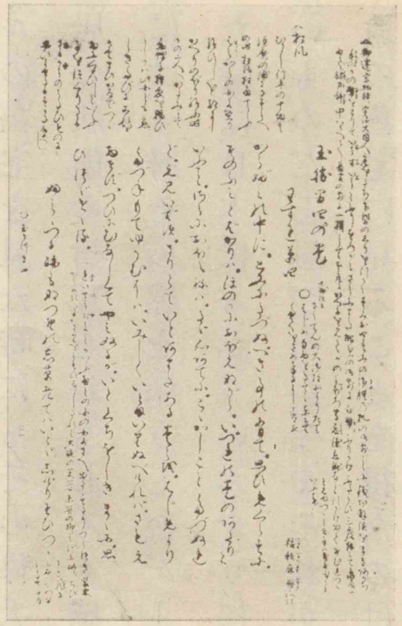
二五　本居翁の遺蹟　その二

松坂へ歸つて城址の公園に行く。ここに鈴屋(一)遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。然し、庭の樹木置石まで、一切舊態を存するやう苦心

(一)今の戸主。翁五世の孫。

(竈)

したといふことで、(一)本居清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井戸も、便所も、舊のまゝの形



宣長の筆蹟

が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸つてゐる。(これは模造品で、本品は陳列庫に在る。)これが卽ち翁が一切の著書の述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたので

(一) Weimar. ドイツの一都會。
(二) Johann Wolfgang von Goethe. ドイツの詩人。(西暦一七四九年―一八三二年)
(三) Johann Christoph Friedrich von Schiller. ゲーテと並び稱せられるドイツの詩人。(西暦一七五九年―一八〇五年)
豁然
(四) Panorama.

ある。西向の窓から差しこむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居のさまが、いよいよ翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマール(一)で、ゲーテ(二)やシルレル(三)の舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の狀態の對比をおもしろく感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲーテ、シルレルの舊宅を見た時は、日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悅ばしいことである。

この公園は四望豁然(四)、パノラマを見るやうな絶景であ

返咲

るが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは、我が國の誇。松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したものはない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿、瑞籬が神宮風の樣式であるのは、一入うれしく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も、返咲を見られて「さすがに本居翁の鄕土故、櫻は一年中咲くのだらう。」といはれたといふことである。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ
風に知られぬ花にはありける

（一）歌人。文學博士。東京帝國大學教授。明治五年三重縣に生まれた。歌集おもひ草。新月等の外萬葉集に關する著が多い。

自修文

本居宣長の母

（一）佐々木信綱

宣長の母勝子は寶永二年四月十四日、伊勢國松坂新町の村田孫兵衛豐商の四女として生まれ、享保十三年、二十四歳で小津三四右衛門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。その長男が宣長である。元文五年、三十六歳の時に夫におくれ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。

小津家は松坂の舊家で、江戸に出て木綿問屋を營んでゐたが、父三四右衛門の代に至つて、資産を失ひ、且つ三四右衛門は四十六歳で江戸大傳馬町の店で病歿した。

三四右衛門の死はいふまでもなく小津家即ち本居家にとつては大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後に世を去つた。かうして遺産として殘つたものは四百兩ばかりあるだけであつたが、それも親戚に保管されて、僅かにその利子が給與されるだけであつた。この間にあつて、勝子は一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人なら殆ど手足を出す術も知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。ところが、勝子は些の狼狽もせず、細心な思慮と明敏な判斷とを以て、雄々しくも一家の經營に當つた。

特に勝子の大先見と稱すべきは、その宣長に對する明察と事宜を得たその教育の態度とであつた。實に勝子の賢明はよく本居一家を危急の間に全うするを得させたばかりでなく、更にまた本居宣長といふ一大學者を生じさせたのである。賢母の功績もまた偉大であるといふべきである。

彼女は宣長が到底商人となるべきものではないことを知

茫然自失　ぼんやりとしてなすことを知らないさま。
窮境　くるしいたちば。
先見　あらかじめ見込をたてること。
明察　よくものごとの眞相をみぬくこと。
事宜　ことのうまくゆくこと。

烱眼　眼力のするどく物事をよく見とほすこと。

(一)二四一二年。

(二)名は正超、安藝侯の儒臣、寶暦七年歿。

(三)京郡の人。小兒科の名醫。安永九年（二四四〇年）歿、年五十六。

り、彼をして學者とならせ、以てその天分を伸ばさうとし、しかも純然たる學者の生活の困難なことを知つて、生活の基資を得る爲に醫師たらしめようとした。その烱眼と共に、生計の點にも十分に心を用ひた勝子の明察と、思慮を盡くしたその教育の態度とは、眞に常人の及びがたいことではないか。

寶暦(一)二年、宣長が二十三歳の春、勝子は宣長を京都に留學させた。宣長はまづ堀景山(二)に就いて儒學を學び、後に武川幸順(三)に就いて醫を學んだ。その間實に五年四箇月ほどであつた。この五年間餘りがやがて宣長の學問の上にもまた生活の爲にも基礎となつて、宣長をして後年の宣長たらしめたことは、明白な事實である。この間宣長をして何等後顧の憂がなく、また都會生活にありがちな誘惑にも陷らずに、十分勉強することを得させたことは、全く勝子の苦心と激勵との結果であつた。

挽回　とりかへす。

この間、困苦の中から宣長を留學させ、一家の經濟を立て、また學費を支辨してゆく勝子の苦心は決して一通りではなかつた。或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘憺してこれを處理した。しかも彼女はその子に對して、例へば會ひたい情をも忍んで歸鄉を延ばさうとしたやうに、もとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては常に事を缺かさず、これを給して、決して愚痴がましいことをいはなかつた。然し、自分の苦心は、或程度まで打明けて我が子を誡めた。さうして、宣長の日常生活につき、また勉學について は、絕えず激勵し、その上宣長の雙肩にかゝつてゐる家運挽回の大責任についても自覺させることを忘れなかつた。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「偖々何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。隨

そもじ　婦人の專ら用ふる對稱の代名詞。そなた。

感應　心にこたへひゞくこと。

分隨分無事にて心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯々一筋に醫者の方心掛け、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く、道々を專一に成さるべく候。此所をそもじ取損ひ取外し申され候はば、いつもいつも申す通り、一人の母この世より迷ひ申すべく候。その上父母、先祖の跡の所よくよく心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじ事褒め居り申し候へば此所取損ひ候はば、親の恥は申すやうなく、大不孝と存じ候」

とあるが如きは、最も敬重すべき大文字である。

勝子が當時のかやうな賢慮と苦心とは、もとより俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。然し、當時勝子から送つた書翰は數十通も殘つてゐるのに、宣長から對へたものは遺憾ながら殆ど傳つて居らぬ。隨つて勝子の心盡くしがいかに宣長の心に反應したかはこれを知り得ないが、然し、その反應の効果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多くこれを勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを歎美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。

素因　原因。

(一) 小說家。名は錄彌。明治五年群馬縣に生まれた。田舍教師。一兵卒。源義朝。等の外、殘雪、作品は頗る多く、今花袋全集十二卷に收められてゐる。

(二) 京都市伏見町に隣れる堀內村に在る小山。

(三) 伏見桃山陵と伏見桃山東陵。桃山驛から東北十町餘。明治天皇と昭憲皇太后との陵。

二六　桃山御陵

田山花袋(一)

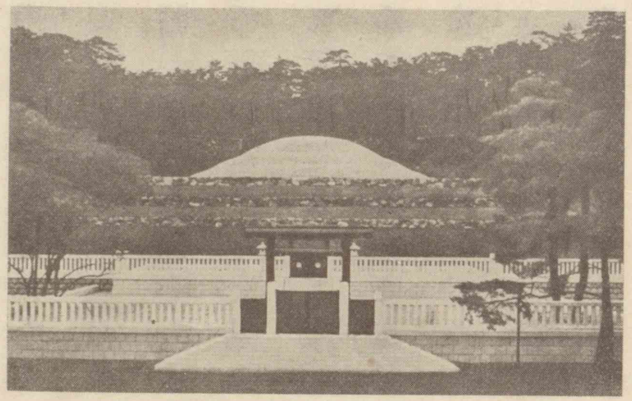
桃山(二)の二つ(三)の御陵では、いろいろなことが考へられる。今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、その前に額づくと、私たちの見て來たことばかりではなしに、遠い昔のことまでも取集めて考へられずにはゐられな

(一)第四十代。奈良縣高市郡檜隈大内陵。
(二)第四十一代。天武天皇の后。
(三)桓武天皇の陵。桃山陵の北西。
(四)第五十二代。

いのであつた。私はそこで、天(一)武天皇の陵へ後から持(二)統天皇の陵を合はせたことなどを想ひ起した。また柏(三)原の陵に御子の嵯(四)峨天皇が涙を流して祈念されたことを想ひ起した。それはその大小はあつたにしても、昔はどの天皇でも、皆私たちが見て來たと同じやうにして、一つ一つその陵を築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲歎をも俱にその中に混ぜて、埋葬されたのであつたのであるに、中世以後はどうなつたであらうか。さうしたことは絶えてしまつて、あの京都の東山の南のはづれに近い泉(五)涌寺の中に、微かにその存在を示されるだけになつたではないか。そして、元からあつた一つ一つの陵などでも、亡び

(五)京都市の東南隅。四條天皇を始め數帝の陵のある所。

た國の帝王の陵ででもあるかのやうに、全く顧られずに何世紀かを過したではないか。中には、どれがどれだか、わからなくなつたやうなものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふことをして置いてはいけないといふことは、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれにつづいた後繼者も、みんな知らないことはなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或


桃山御陵

驕奢

徒爾

は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心も盲ひて、そこまで手を出す餘裕はなかつたのであつた。然し、長い間の歷史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に闇い闇い歷史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に着目して、それによつて勤王の志を燃立たせようとしたもののあつたことなども、徒爾には見逃してしまふことのできない事實であつた。

桃山の御陵に參拜するものは、誰か我が大倭の昔を思ひ出さぬものがあらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉きな功業を。自ら戶を閉ぢるやう

卑屈

感傷的

脫却す

な卑屈な政治の狀態から脫して、飽くまで外へ外へと伸びてゆかうとしたその立派な對外の硬政策を。なん等の好運ぞ、私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり力ある世を、ありありと眼の前に見ることができたのである。佛教などに惡くとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脫却して、更に自由に大きく呼吸づくことができる世に遭逢したのである。私は桃山陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞得るやうな心持がした。

—花袋行脚—

改新女子國文 卷三 終

昭和四年九月二十五日印刷
昭和四年九月二十七日發行
昭和五年三月二十九日訂正再版印刷
昭和五年四月二十一日訂正再版發行

編者 芳賀矢一
訂補者 橋本進吉
發行者 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 冨山房
代表者 坂本嘉治馬
印刷者 冨山房印刷部

檢印

改新女子國文奥附

定價	
自卷一至卷四	各金四拾六錢
卷五、六	各金四拾壹錢
卷七、八	各金四拾錢

昭和六年度臨時定價	
自卷一至卷四	各金七拾參錢
卷五、六	各金六拾五錢
卷七、八	各金六拾參錢

發行所 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 冨山房
電話九段 一九三一―一九三三番
振替口座東京五〇一番

野本製

第二学年　ロ組
粟屋孝子

第二学年D組
粟屋孝子
(40)